390
20

始

農林叢書

民間造林の中より

埴谷杉造林法

蕨農林山人著

『大日本山林大會を千葉縣に迎ふる時、

記念に再版す』

390-20/1

農林叢書

民間造林の中より

大正 11. 4. 28 内交

千林映日鶯
亂啼萬樹
園春燕進飛

不折鈼題

內藤鳴雪翁序

蕨眞一郎君は上總國山武郡埴谷累世の林業家なり君に及びて事業を擴充せられ孜々勉勵更に農林學校を設けて子弟を敎養せらる、其志と功と誠に嘉すべきなり。

斯書は君自ら其來歷と訓誨と方法とを詳述せるものにして、唯後生を補益せるのみならず、國家に貢獻せらるゝ所鮮少ならざるなり、今通讀の餘一句を題して以て其刊行を奬むと云爾

松杉や　茂りて　國の柱にも

大正八年吉辰

鳴雪

序

本書の著者、農林山人、蕨眞一郎君は又の名礎山道人、歌の名蕨眞（わらびまこと）、歌を正岡子規居士に學びて高足たり。

居士嘗て謂へらく、

貧乏村の小學校の先生とならむか、日本中のはげ山に樹を植ゑむかと存候。造林の事なども面白か

るべきも其方の學問せざりし故、今更山林の技師として雇はるゝの資格なし。自ら山を持つて造林せば更に妙なれど買山の錢無きを奈何と君は夙に父祖の業を承けて、山林を經營し、その餘力を以て農林學校を建てゝ農村の子弟を教育す。居士の理想は實に君に依りて實現せられたりと謂ふべし。居士泉下の靈大いに愉悦する者あらむ。礎山

君請ふ旃を勉めよ。拙歌一章聊か以て祝慶の意を表せむとす。

○

上つ總埴谷矛杉、すぎし世を事のくさ〴〵。
今はもよ現に觀れば、其幹は天にそぞり、
しが枝は地おほひ立つ。瑞瑞し埴谷矛杉。
其の杉の高きが如、其の茂り廣けきが如、
此のふみの共に榮えめ。彌繼繼に。

反歌

睦岡の、埴谷矛杉、すく／＼に、おひ立ち行かむ、めぐし此の書。

大正八年秋季皇靈祭の日

村上檜村人

自序（一）

農林山人嘗て木曾山に遊び、其山嶽の大川を帶び巍々として秋天に聳ゆるを見、行々高所に攀登し、其地形を察する、實に二千尺より四千尺五千尺の崇高を以て蜿蜒三十里遙に富嶽の藩屏を爲す。其森々として天空を摩するもの之檜樹林なり、其林中に入るや大概皆老木鬱蒼として大小長短は即ち之有と雖も、

一木も其處を得ざる無く一樹も其美を有せざるは無し。誠に天の隨にまに斯山林美を發揮しつゝあるを觀て深く之に感じたりき。

歸來我が兩總の平地林を視るに、皆之第三期より第四期第五期の人工造林にして、或は其所有者の勞苦に成り或は其の放縱に因して大半は其所に因らず、發育亦微々として徒に被壓木の弊習を存じ、而して未だ良樹共存の理を解せず、漫に乱伐を喜ぶ者續々之あるを觀、茲に獨り慨嘆するもの日久しかりき。

後數年にして漸く私立埴岡農林學校は創立の運に到り、同時にして國家と個人との關係を研究するの日旣に七迎年の春期に及びたり、抑々我が帝國の世界に於けるや、宛も山嶽林の如き位置を形成し以て萬世一系一體の山嶽的威靈と共に其崇美を生じ、上下心を一にして、長くも天孫の尊嚴を守護し奉り、皇室と國民との關係は山嶽と其森林又は林木との關

係の如くして密着的の精神は即ち大和魂と稱し以て天地正大の氣を示し、永久不易斯美を失ふこと無きを期す。　天祖の神勅は旭日の照臨に比しくして、之を古今に通じて畏まざる者なきなり。

然り而して吾人此國家に人と成り、之を彼歐米の人工平地林的の共和政に對し見るに豈同日の談に非らざる事、元より山人の言を待たずして知るべし。

山人既に實地に於ける丘陵及平地林の一部的經營に任する事久し、故を以て平地林には徒に被壓木の弊風及生存慾の迫害のみ絶えずして些少の崇高美も之あらず、常に爭奪的の害毒に苦み、彼盜慾者流の心理を思ふ毎に、遥に天の一方を望み、曾遊の一大美感を回顧する事深し。

若夫れ外人にして我帝國の國體美を敬慕するは、山人と此感を同うするなからむや。然るに頃來我國青年者が學問藝術の中毒は敢て自身が、斯の山嶽美中

の林木たるを忘れ以て自ら此森林美を傷はんとし彼の盗伐的外人の虚僞心に與せんとする者あるを聞く、これ實に本末內外を辨へざるの致す處と雖も、妄に天地の大自然に逆ひ苟に雜木雜草の珍奇を弄ぶの類の如き心か。是れ吾輩山人の愍察に堪へざる所以なり。今や大正六年の紀元節を迎へんとして茲に之を思考す。

《大正八年八月三十一日再記》　著者識

自序（二）

東風一夜入山園。已有梅花發短垣。君見春郊千草木。
芳菲孰復不皇恩。

これ吾が斯文の師吉井老湖翁が山武郡の春調ふこと早くして、その春郊の美なるに感じて吟詠せられたるものである。

千葉縣と言ふ中に、其要領を得て造林して居るのは、

今日は所謂模範村源村の、之も模範村に缺くべからざる御骨折で見事に植ゑつけられてあるを見ても知るべし。日向村睦岡村豊岡村等に於ても皆先づ植附けられてある、印旛郡にも數多之ある。そのうち睦岡村埴谷は、幕府時代の造林である。しかも人工の挿木造林を見事に出來あげて有る、其造林の初期には常に思はぬ苦心的忍耐經營もあつたのであらうが、吾等の見知る樣になつてからは、たゞ順序的に植ゑて好く氣永く保つて居ればよいと云ふ風にして、土地の適當なる爲め樂であつたのであらうか。そうばかりは勿論行かない、それ故、此造林中、危なかつたのは世の中としては明治維新の際、舊習破壞的のそれが經濟上に流行して、こゝ林業家にも眞の愛林思想が無かつたものは此時大抵亂伐の運に勸誘せられて仕舞たのである。是の時睦岡村の埴谷に於て超然的態度を以て維持したるは、蕨磯左衛門家、牛尾

三五郎家、　豐岡村金尾に於ては、　高宮新五兵衛家、印旛郡彌富村に於ては、　檜垣重右衛門家、　同郡富里村久能に藤崎晉作家等であるのだ、　この他に多々小造林家は在つたのであるが皆維新前後に於て鎮守の森を皆伐するが流行的であつた時、　やたらむしやうに伐つては金にし伐つては金にし、　今の時勢は金が第一番ぢや、　金が第一番ぢやとくりかへして無けなしにも伐つてしまつたのである。　檜垣家は就中雄大なるものであつたが、　物極れば必ず變ずの理で現今は皆新畑地にして仕舞つた、　惜いことであつた。そこでこの、　新畑にもせず金にもせず女にも費さず固く保護して永く維持して行くといふ事が、　民間に於ては實に容易の業では無いのである。　隨分蕨家へも緣家の存亡及自家の存亡的病難その他害蟲と言ふやうな者がいくらも寄りついて、　より以上の艱難悲慘があつたのであるが、　其れをたゞ一忍の努力的忠

怨心を以て存續したるは山人の父巖重三郞翁の志である。然して漸くにしてさし木造林の現形を見ることが出來たのである。牛尾家に於ても大同小異で緣家政治家其他時勢の潮流で亦より以上の危い時があつたさうだが、先代三五郞翁の愛林思想最も堅實なる爲めに今日の春光に聳えて居るのであるさうだ。高害家、藤崎家等皆小異大同の境遇を經た樣である。是を以て考へて見た時は何事でも、其人の思考の動

きーつによりて仕方がないのであるが、最も永久に於てこそ斯造林業は功績あるので、其存續の力即ち造林家の其要點たる主人の頭、それ一つを先づ高尙なる山嶽の如くにして始めなければならぬのである。若し少しく俗的に染みこまれなば最後は罸ならぬ伐の皆伐となり、且つ無用に亂費して倒るゝの傷ましきに終るのであらう。

そはさておき、山林の樹木の實に善美に生育すると

いふ事は、斯民と同じく即ち吉井翁の詩の通り上は皇恩の御蔭に之依るのであつて。苟にも支那的の變テコ風なぞが吹けば、山林は第一空（カラ）になるのである植樹の生育するところではない。然して下は前記の愛林翁の如き力に依るのであるのぢや。けれどもこゝで、

更に一つ考へなければならぬ事が在る、それはといふのは、幕府時代より明治時代へかけての事は既に遠く過ぎたが、明治より大正の事は今まさに最中の段である、何が最中であるといへば、經濟的魂膽ごたすたの最中である、上下を問はず、實にこれには困るのである、そこへ持つて來て、所謂新しいの流行が、電氣、飛行機の眼に見える物で世の中の驚くよりも、人心の新しいあやふやの何から何まで影響波動、感染浸入することの迅速なる、何とも言ひ樣のないのである。然しながら之は、市や町やは別に

何を以て之を恐れるかは吾人は云はず、斯の農村に於けるは皆人の知る所であらう。この處が斯造林中に最も恐しいのであるのぢや。こゝに於てか………

私立埴岡農林學校は、未だ世間に其要領をさはどに知られては居ないが、全く前記の總ての實際より案出して建設したものである。

かくのごとく記し來りて見れば遂に隨筆的の記事となつたから、所謂理窟家の人に何とか云はるゝか知らぬが、斯道の實地家並びに文學美術家に森林美を見て戴きたい處もあるとおもふ。

尚處かはれば品かはるゆゑ遠方各地の事業に就いて聞きたいのである。（此稿大正四年三月記す）

大正八年八月三十一日

蕨　農林山人再識

例言

一、本書記事は大正四年三月より大正八年八月までの間に於て、雜誌『農林』『農村研究』等へ掲出せるものなり、今回民間造林の事に關し聊か御參考として申すのみ。

一、民間の造林は、其技術を能く心得たる上にして更に人生の苦境を少くも三十年間或は百年間忍

ばざれば成功せず、本書前編は半之を記せり。

一、今夏炎暑の際編輯匆々に取纏めたれば誤字誤植等もあらんか。豫め讀者に之を謝す。

大正八年八月三十一日

著者識

目次

前編

前がき……一
一、地理及歴史……二
二、人及業務……一三
三、人、及業務並に精神……二〇
四、人、風俗、敎育……四一

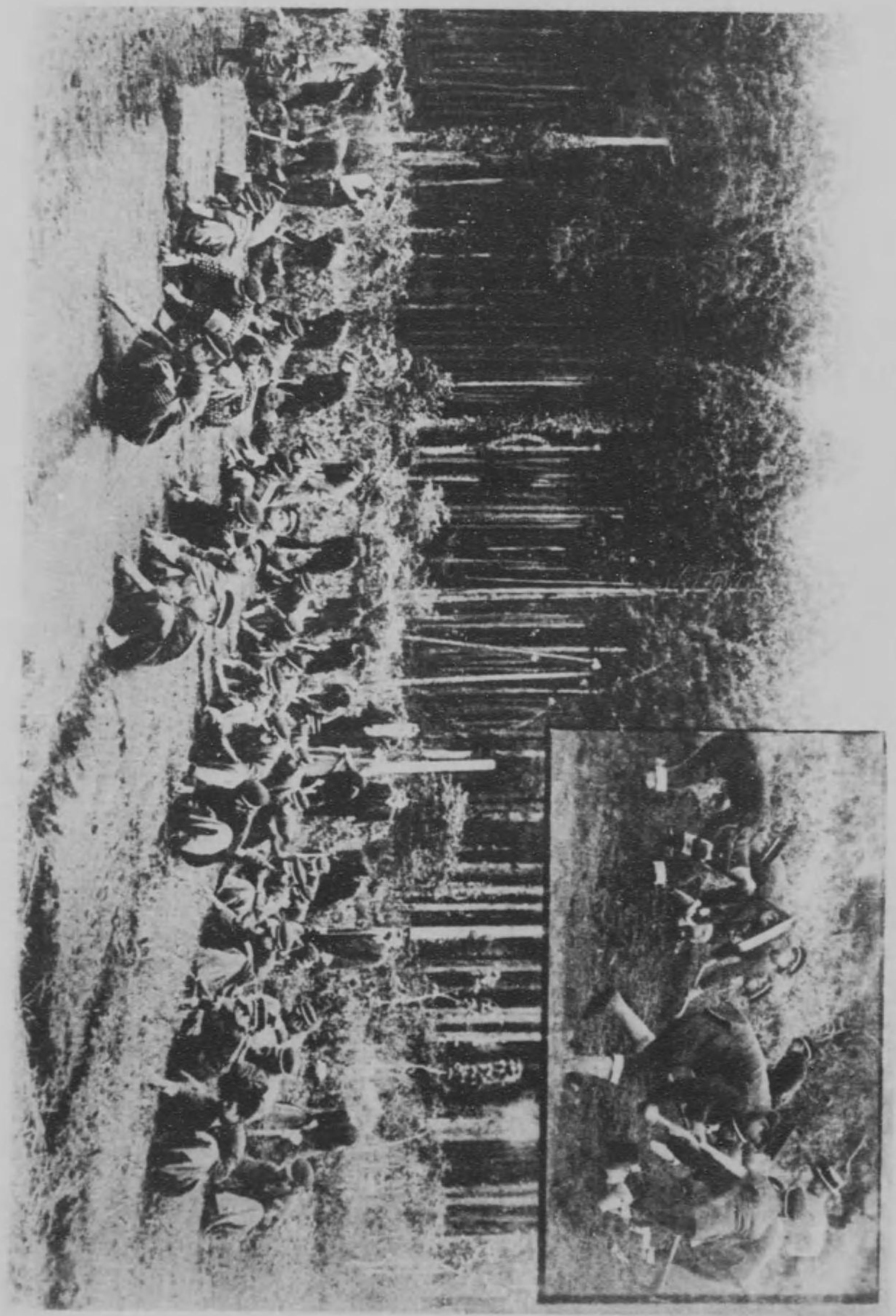
後編

はしがき……五四
一、苗を作る方法……五七
二、林地の選定……六五
三、苗木選擇及定植法……七一
四、森林保護の事（一）……八〇
五、森林保護の事（二）……八六

一、本書題字は、出版前に際して、先師正岡子規翁の親友中村不折書伯に乞ふて、特に森林美の記念と致し候

又内藤鳴雪翁には嘗て吾が農林學校へ來臨ありて斯の山林趣味を賞せられ今回は序及俳句を賜り候。茲に御兩名に深く感謝申述候。

著者蕨生



民間造林の中より

（前編）

蕨農林山人著

《前かき》

《埴谷》。埴谷郷。和名抄、武射郡埴谷郷。本書諸本、埴字を塡に作るは非なり、高山寺本に従ふべし。されば今の睦岡村、及日向村にわたり、新居郷の西を指せり。

埴谷。今、戸田、横田、沖渡、中津田、等を合併して睦岡村と改む、成東の西北二里、山間の名邑とす。

埴谷は、文録三年水帳、半谷に作り、天正二十年家思日記に、

上總知行はんやの郷千二百餘石(戸田といふもあり)即此とす。埴谷大椽氏と稱するは千葉家の一門にして即之に古居したり。云々(以上は大日本地名辭書に依り地理説明の一助として玆に掲く)

(一) 地理及歷史

一、千葉縣上總國山武郡睦岡村埴谷といへる鄕土はほゞ前掲の通りの古村である。明治年間町村制施行の際、睦岡村と改むる時迄埴谷は舊幕時代は元祿十三年の三月と八月とに名寄帳確定以來更に村としての一勢力ある所となつて、舊武射郡方面三十六箇村の親村といふ格でやつて來たのであつた。埴谷八百石といふ言葉は村の父老より屢々我幼時の耳にもきかせられたのである。このうち宿といふ處の半部餘りが知行の都合上から水野日向守の領分となつて居て、其他は悉皆、曲淵領といふて即ち旗本の知行所であつた。曲淵氏は甲斐守と稱して二千五百石を領して居つたのであつた。埴谷より六里南に當つて舊粟生野村といふは其知行の內であつた。今の日向村成東町等は皆、水野日向守の領分であつた。後明治維新の際、遠州掛川より太田備中守が今の松尾町へ移り來つて松尾藩と稱する領分內に日向も成東も睦岡も一時其支配を受けたのであつた。明治時代に戸長役場の際は、埴谷外五ケ村を管

理したので、即外五ヶ村とは北部は横田村、沖渡村、實門村、南部は木原村大木村（今の日向村に在り）等であつた。其戸長役場の少し前に暫の間、第九大區三小區扱所といふ役所の時があつて、椎崎村（今の日向の內にあり）戸田村等も其範圍內であつたと聞く。

◎明治二十三年、帝國議會開設後に町村の分合、役場設置の際、埴谷村は相變らず中央の勢力を有して居つたから其時附近の村は舊來關係の、横田村、沖渡村、實門村、轉じて東方部の坂川村、中津田村、板中新田それから舊時代關係の戸田村、及新に麻生新田とも合せて一村九區に分つて、村治は新治績の第一歩をふみ出

したのであつた。今は埴谷の部を、諸木內、井の上、宿、寺ヶ臺、白玉の五區に分て居るから改て一村十四區である。

玆に一つ肝心なる事は、埴谷村に於ける鎭守の事である、次に妙宣寺といふ寺の事であるが寺の方は、後日として、斯地理上、鎭守樣山王大權現の御祭禮範圍を記して置く必要がある、それは往古は嵯峨天皇の大同年間あたりから語り繼ぎてある山王樣だと古老の言葉であるが御祭禮範圍の最初の村は、諸木內村、小原村、（井の上、宿、）寺ヶ臺村、横田村、沖渡村、實門村、白玉村、以上七村の總社と申し傳へてあるのである、其後色々の變遷もあり御祭を例の大きくは出來ない樣になつても、諸木內、井の上、宿、

寺ヶ臺、此四區は何でもかんでも一心不亂に御祭に仕へて變る事の無いのである。然して、古老の心よりして『山王様へ樹を植ゑて奉(あ)げるは何より大切の事だ』と今に傳へて在るのである。

以上は少し歴史的方面が長くなつたけれども。こゝろみに鎭守の大木となりて考へ寺門前の大樹となつて考て見たならば、更に細(くは)しく面白き地理歴史がわかるのであらふと思ひつゝかくは記したのである。

◎そこで斯郷土は。舊幕府の江戸から十六里といつて。彼の銚子港から旅立つ者は八日市場へ宿つて埴谷驛へ宿り若くは今の八街村舊柳澤牧小間子牧等三里の原を越して馬渡(ウマワタシ)驛へ宿り、さて犢橋(コテハシ)通り市川の渡しを過ぎて江戸へ入るか、船橋、又は行徳へ宿つて江戸へ行つたものである、(其頃の千葉は未だ小さい町で船橋の妹であつたのだ)。今は即ち東京を離ること僅かに十七里、それを滊車にて二番列車としても朝八時に我家を立ち九時六分日向驛發に悠然と乘込んで、在原業平朝臣の感慨ある、都鳥の両國橋も今は既に東京大都の中央部に接近して下車する事ができる。其間實に二時間で即ち十一時六分着であるのだ、一番列車ならば十時五分である總ての時間が三時間位しか要からぬ。林地から荷馬車へ木材を積んでガタゴト泥濘路を牽いても二時間で日向驛でも其隣の八街驛へでも又は成東驛へでも出られるのである。道路の惡いの

は玉に疵である。

◎東南風一朝荒く吹く時は高木で無くとも之に當る風は恐ろしい其九十九里の向太平洋の波濤に二里は平旦地一里は丘陵を以て隔つて居る、海拔は五十尺より百尺餘の丘陵地に在つて、下總の八街村が手掌であれば埴谷は五指の形を成して東方に開いて居る、此五指の間は水田である、五指の小高い處が即ち林地平な處が畑地といふ次第であるのだ。睦岡村と廣くなつては三里塚の御料地の方から更に左手を添へて開展したるの形狀となるのだ、そこで是の地理は申分ない處である。も一つ形容すると吉野口停車場が日向驛であらば埴谷が吉野で金の鳥居のある山あたりである、しかし吉野の百分一しかない。

温帶林區域に屬し居るから、松杉檜は勿論大抵の樹木に適する。林中は昔から針葉樹が最も多い闊葉樹は少い、(樟樹は近頃植えて見たが未だ研究中である）松、杉、さはら等何れも人工造林にして既に第三期を過ぎ第四期に至れる處である。肥沃なる八街平原は畑地と化して昔の牧場跡に一大新村が出來上つた、其東側に古村の林地は開墾畑として八街に優る程の好い土質である、故にこゝの山林は大抵關係的林地となりつゝある。しかも指形なす處の岡は傾斜凸凹數ふるに暇ないほどある。こゝを利用して巧に適處に適樹を植着くる事は刻下の緊急用件であるのだ。少くとも郵便

貯金以上の肝心なる事である。人口の比較的小數なりし舊幕時代の埴谷造林は單に松を植え杉を植た位でよかつたが、今やわづかに四五年の間に寄留人もいよ〳〵多くなつた爲め戸數の百戸も殖ゑたといふ睦岡村の狀況の其中央なる埴谷の岡を先づ如何にせんと心配して居るのである。

されば及ばずながらも、私立埴岡農林學校は此等の邊も大に考へて建立したものである。

◎現今睦岡村に存在する樹木にして最も古いは杉であつて、寺の所有である、其うち妙宣寺といふ寺は、所謂埴谷大椽氏なる埴谷景正が應永年間に建立し、初祖として僧日英、而して有名なる鍋

冠日親上人は埴谷の大丞左近將監の次子なりしが出家して中山寺の日英上人を師としたのであつた。

この寺の門前の杉二本が今日では一番古木である、根本が高く上りて居る其邊を計れば三丈餘もあるが凡そ目通りは二丈位で、此寺創立の後に程なく植えたのであらう。それを初めとして大少數多境の內外に在つたが十數年前に大抵伐り悉されんとして今は殘りまばらに見える。其れと少し離れて長光寺といふ寺は亦日蓮宗で田舍の寺としては伽藍の造りも良い古刹で此寺の大杉は周圍少し前記のより小さいが、長さに於て然も枝下の優美なるが見事である、それが五六本、次には六尺圍り位までを數へて百十數本境

の内外を裝ふて、其寺院庭中の櫻の大樹を守れる如き有樣で實に花の頃は相映じて美觀である。
今現在の事は寺の大木だけであるが。明治十年頃までは。鎭守の森に更に大なる老杉古松があつたのである。凡そ農村で鎭守の森を皆伐するなどといふ時勢ほどいみじい時はない、此折に我祖父が其中より買うて改めて立木と成して置いたといふ松數本あつたが其殘り一本の大なるが明治四十三年に枯れてしまつた。今や大正の聖代に於て新に御社の森林美觀を盛ならしむべきは吾等の任務であるのだ。

(二) 人及業務

◎人工造林となれば先づ人間の事をくはしく考へねばならぬ。しかも悉くは記すの暇ない、概略自分の知れる事及自家に直接間接の要點よりして斯の造林に因緣ある事を記して置くのである。
◎この埴谷といふ處は前記の通り土地が好くて物に不自由が無い安樂的に暮せるといふ觀念が少し住居して居れば誰にもまづ浮ぶ俗人や無學の者に最もいちじるしい、そこで大体橫着者が何時の時代でも多いのである。

公父文伯の母の言つておかれた通りである、即ち沃土之民不レ材淫也。瘠土之民無レ不レ嚮レ義、勞也。

未だ以て此格言を脱する事が出來ない。そこで所謂土地兒(とちこ)は大概身上持が下手(へた)で仕様がない、これまでの處を考へ見るに壻が來て土地の風を害し其家政を破ぶつたも往々あるのであらうが今は措いて言はず、其變遷の折々には女壻に依りて家政の改革、新進發展等の勤勞的善美なるを致すを得たといふのである。然しそれを繼承して繁榮に赴かしめたるは其子即ち善良なる土地兒の業であつたといふのである。

◎鎮守産土(うぶすな)神様(さま)は深く此邊の處を御考への結果、此岡へ出來得るだけ杉樹造林を爲さしめて置く、植たての苗木なれば道樂子息の目にも先づ無事に經過するといふわけであり且つは荒廢地へ良樹木の繁茂するは實に國産發展の第一位であるからとも想像し申すのである、それゆゑか此村の人工造林は挿木造林と共に誰が最先きに創めたといふ話もなく、少し土地經濟に餘裕のある者は必宅地構へを直して背戸山といふて家屋の背後に杉木を一畝乃至一町歩位も植ゑ仕違てある。されば一般林地は云ふまでもなく其れと同時に造林しだのであるのだ。

それでまた樹が大きくなつて來ると、やゝもすれば一本伐れば幾日酒を呑める、幾日遊んで食つて居られるといふ考を浮べる者も

ある、然し是は大方他方よりそゝのかし始められるのであるやうだ。用心すべき事である。

◎元祿十三年の名寄帳時代の前後よりして、家名家政共に維持して居るものは殆ど稀有である。日向領に於ては名主役であつた鈴木吉右衛門、曲淵領に於ては其代官役であつた蕨礎左衛門、維新前後より家政の勃興と同時に名主役になられた牛尾三之丞、此三家である、埴谷村草創の農家所謂大惣代役の蕨庄右衛門、埴谷の漢學者として書を以て有名なる蕨蘭窓、農商縱横の才識を活して且つ名主役もやつたといふ蕨又右衛門、此三家は甚しき隆頽を經て今日は無事に家政を盛ならしむるに務めて居る。皆言ふまでもなく農本業の百姓家で傍ら林業を營だのである、然も亦一方には其當時の役向を勤むるを以て光榮としたること、今日の何々議員になつて見た事以上の心懸であつたらしい。

◎戸田村に於て麻生摠右衛門、沖渡村に於て富谷平右衛門此両家は各村治及造林に就て大に盡力的關係がある、麻生新田といふは即ち麻生氏が享保年間に公儀より拂下げをしたので其名あるのだそうだ。富谷氏はわりもと稱して名主以上の人望を有して居つたといふ。亦背戸山を以て蕨蘭窓家と共に有名なるものである。板川村に關次郎右衛門氏は勤儉篤實なる愛林家を以て知られて居る此外幾多の人々はあれども今は數代に繼續して且つ大正の今日に

及びたる人々を擧げたのである。
◎背戸山は特に上總下總のうち平地丘陵地の名物である、上總に於て（山嶽方面の村では、別段に森林を屋後に拵へて眺めて居らすとも山嶽が前にも後にもある故この必要はない）、之は一に風致を好むより生じたもので幸に杉木の成育も適當なるゆゑやがて經濟上に密接なる關係を及す次第にも到れるのであつた。
或時代には之を一種の誇りとして居る時もあつたが、其れを嫉妬せずして却て賞讃して居たのである、それと同時に道路の直ぐ傍に於て大木の出來上つた事である。實に古人の教訓通り、方長不折を堅く守たものである。此等を觀て埴谷及各村々の如何に其昔

人氣の善良なりしかを知る事が出來る。然しながら之を更に能く考へて見ると、其名望ある農家の主人が、直接に能くこの土を踏で勞働した賜であると云ふ事が明になつてくる。それに反して今の名望ある農業家はどうも親しく土を踏んで草鞋的の勞働をせないそれで水田は好く作れるかわからぬが林業はとても出來ぬ。
◎茲に温古知新の所以に因みて自家と造林及其効用等の古を記して、我農林學校の父兄及子弟に一讀を求めんとぞ思ふのである。敢て大方君子の御目にかけゝる程ではない尤他家一般の事業に就て記さんとも思ふなれど一々明瞭にするを得ざる故或は語弊を避けんと欲するのである。

わがひとり木の種まけばたなそこに
その躍る音、土に着く音。

礎山

(三) 人及業務並に精神

余は先般静岡縣にて開催せる大日本山林會へ參會したる時、一老人ありて左の如き講話を爲られた事を深く感じて記憶に止めたのである。他に幾多博士たちの有益なる講演のあつたのではあるが其一老人の講話を感銘する所以が自分の頭にあるからである。

まづ老人の講話は大略かうであつた。『私は今日大日本山林會第二十五會總會へ出席致しますまでに八百餘町歩の山林地へ樹苗を植ゑあげてから出て來たのであります、八百町歩と申しましても植ゑました面積の他へ比べて廣いとか狹いとかの考へ又は其植方の事を申すのでは御座りませんで、私の造林した精神の事について一言御話致して置きたいと申すのは、年寄の骨折話のやうではあるが是も町村の自治と林業といふ事の有益有功なる事を考へたからであります。

私は佐賀縣の某と云ふ者であります、今日我が大日本帝國の世界列強の大戰爭中に處して居る、時の內閣總理大臣大隈伯爵の生れ

ました其國の者で御座ります、その國に生れて年も漸く七十に垂んとする老人でありますが、私は一箇の山人で政治家でもなければ商業家でもない、今日諸君に御目にかゝつて居るこの通りの人物でありますが、たゞ吾村を行く行く繁榮に赴かせたい我帝國を益々隆盛に致したいと思ふ心の巳まぬ處からして唯自分の勢力を厭ふこともなく造林の事をやつたのであります。私の村は同じく佐賀縣であると申しましても、極めて山中邊鄙なる寒村で、市町へ出るに十里、縣道へ出るに五里、汽車に乗るに八里といふたやうな極めて不便な寂しい村であります、それではありますが我帝國の土地は尺寸たりとも大切である吾が同胞同村人は一人たりとも隆昌の運に赴かせたいと平常いつも思ふて居る吾村の將來を熟考して各種の方面からどう考へて見ても、先づ道路を開く事が第一である、其道路を開くにも、縣稅の負擔を此一村の爲めに縣下中へ懸けるのは出來ない相談で且つ自己の本意で無いといふ處から、こゝに年月は要するけれども此村の荒れに荒れてゐてしかも面積は廣い山嶽地へ造林を始める、それが豫定の通りに三十年或は五十年も經過すれば村として一定の財源が出來上る其時に到達すれば其林木を伐採して積み出すと同時に道路も巾が廣く縣道の如く立派に出來る、經濟は機關の銀行も出來る、文明的の實業教育も之と同時に興起發展する事ができて即ち彼の縣道の縱橫に通

じて居る幾多の町村と同樣に文明の德澤に浴する事を斯造林に依賴して之を成さんと考へて、幾十百人の勞働者にも、此心を以て働いて吳れと言ふてそうして十數年前から豫定の山林地八百餘町步の造林を致す事が出來たのであります」といふ主意要點は今も余が耳に存じ居るので、幾度か自分の境遇に思ひ合せて見て即之を記てたのである。顧ふに佐賀の老人の計畫は既に豫定の第一步を實行したのである。今吾が農林學校の出來たのは、嘗て吾が祖先の亦彼老人の如く豫定せる其一部分を、今大正の大御代に於て其効績は所謂九牛の一毛だけならんとは思へども之を有効に完結して吾が祖先に答ふる當番となつた吾等は實に責任の重きを自覺するのである。

◎さればこゝに溯りて吾祖先の辛苦經營を記し以て吾農林の子弟に示すである。埴谷村草創の百姓。嚴庄衛門家は吾が遠き祖先である、村の草創以來名望に變りはなく經過したのであるが、家政經濟は一たび窮地に落ちて其或時は老祖父一人と中年の母親と幼兒と僅に三人ばかりの淋しき時代もあつたので、其時吾が近き祖先は、長生郡高根本郷村の生れであるが、江戸幕府の極めて隆盛なる頃に、芝口に小西本店(ホンダナ)と稱する其大商店の番頭を勤めて居つたのであつたが、それが所謂不思議の緣で埴谷村庄右衛門家の女壻となつたのである。

◎一たび一家の女壻となれば、舊幕時代の事ではあるし其勤めは勵行したものであつた。夏は土用中へかけて麥擣きと言ふて農家の仕事中最も流汗淋漓的勞働である、それも厭はないでやる、冬は寒中迄も秋田うなひといふて苗代田の分を始めとして出來る限り田うなひを一心にやつたのである。それまでやるものは舊幕時代でも少し村の重立つた家では、百軒に十軒はやるものは無かつたのであつた。それを所謂御江戸の商店の番頭あがりと云はれつゝ遣つたのであるから餘程ひどかつたに相違ない。然るに其勢力空しからず、三年ばかり經る程に、略、衣食住は安心することが出來て漸く庄右衛門家の舊業を考つゝ居つたのである。

◎其の折の事で有たのである、芝口本店の主人が銚子見物の歸途何でも埴谷村といふ驛場で重立つた家の養子になられたさいふから是非尋ねて見たい、といひつゝ二三軒開く程もなく知られた。折しも例の麥擣最中の場合へ御出られたといふ事である。

◎芝口の主人は實に其勞働に感じいりて、鳴呼田舍へ來れば業務も全く變りて、如斯不得手の勞働に依りて勤めて居る、是まで江戸にて研いた智識の一端を働かす爲めに店に遊んでゐる金の幾分を送り越すからそれを以て出來るだけの經營（シワザ）をやつて見よ別に利息などの心配も要らぬからとの言葉を殘して別れたといふ事であつた。天は自ら助くる者を助くといふ西洋の諺ではあるが、近く

吾が祖先にも實例のあつたのである。

◎それから酒造業を創めた（幕府時代に酒造業者は株といふ定りがあつて其れを一般の信用と金とを併せて買ひ得て始めて其業が出來たとの事である）然して庄右衛門家の恢復を速にすると同時に此埴谷の岡の龐雜なる松樹林地や雜木林地などを餘裕にまかせて買つたのである。

◎家業の盛運に赴くとは何れの時代でも嫉妬的をやられる、村の百姓某から何事なりしか訴訟を仕掛けられて江戸迄も出るといふ譯であつたが幾程もなく相手方は平伏したさうである。

◎その訴訟中に際して名主格に取立てられ其後に於て曲淵領中に

於ける實地統括の任を命せられて代官役を勤め申した事である、繼て明治維新の際に及んだのである。

◎玆に庄右衛門家の再興も既に完全に赴いた時を以て一家を新に建てゝ一人の實子を携へて隱居をせられた、是即ち吾家の曾々祖父にして通稱蕨喜藤太といつたのであるが、後に礎左衛門と改めたのである。吾が今住居する宅地は同じ所であるが家屋は曾祖父の時火災に遭ふて更に建築したのである、今は百餘年を經て居るのだ。新に家を建てたゆゑ新宅（分家の意味）と人は呼んで居るがそれは間違である。隱居をして更に發展したのである。

◎たゞ隱居の息子的で、たゞ安樂的に世をすごすべかりし余が曾

祖父は、極めて實業經濟に發展的の力を有して居つた、即ち父の江戸及田舍に於て苦勞して覺えた其經驗の全力を受け繼いて更に錬磨して斯業に奮勵したのであつた。然して先づ領主に極めて忠實に仕へ其功を以て鎗一筋及乘馬を賜り士族の伴に入れられたのである。そこで先きに造林したる森林は既に二代へかけて生育したるに添へて更に擴張する林地は皆荒涼たる雜木林を革新して所謂さし木造林の端緒を設けられたのであつた。

◎この時に自村は申すまでもなく同郡近郡の各名家と光榮ある交際ができたのであつた。

◎かく記し來つて考へ見ると我家の寶は林樹にあらず實に勤勞と

實業的智識の二つの玉のやうであるが、それは何處にもある寶である、唯それを終始一貫せる正直忠實の玉の緒がある是は今も吾が親族中誰一人否といふ者はない、正直まけの實にそれである。

◎それから人の身上に三代目といふが實に三代目は危い時でむつかしい時である、故ニ受レ之（易序卦傳）といふ時且つ幸に吾が祖父は好學的信仰家の正直者であつて、そして義を守ることあまりに堅い性であつた。あまり義理堅い故に一家の瓦解に遭ふ程の憂き目にあつたなれど且信仰の德に因りて更に無難にをさまる事を得た、のであつた。それから祖父の一大事業は維新の初、育兒取締の役に任せられ。一時は專ら人の兒の生命をして完全に發育せし

ひるにのみ之勤めたのであつた。是は他日を以て詳に記したいと思ふ。

◎是時に當つて、椎崎村、吉井家の吾が外祖父は（號呈庵）、夙に斯文の爲めに辛苦をものとせず歳漸く十一の頃、遠く常陸の潮來なる宮本茶村翁の門に入り、やがて水戸學風の一般を上總の一部面に傳へたのである。然して醫を以て本業となし詩を好で老の到るを忘るゝ程であつた。それ故同村及附近町村の父兄子弟に最も良好なる教化を及ぼす事が出來たのである。然して吾祖父とは知巳親友中に好學的良友であつた、こゝに於て初めて我家へ斯文の趣味が傳つたのである。先年山人が年少の頃好で『日本』新聞を讀み因つて伊藤左千夫氏の紹介により正岡子規先生の門に學び文學趣味を知るを得、近年にいたり吾が農林學校を建設して適ま斯文の純粹なる桑原先生が山路を遠しとせず來つて此教育の基礎に盡力せられたのは亦茲に基因して居のである。

◎しかも所謂三代目は危いの諺に漏れず危くあつた事は、我家に於ては、埴谷の酒屋と稱せられた。其酒が幾度か釀造の失敗を來したのをまがごとの始めとしてそれから病難の限りなく打續いた事である。しかのみならず、明治維新の變革に於て、上は領主曲淵家の既に知行を離たれて淪落して來り訪ふあり、親戚故舊の十中八九は皆維新氣運の變遷に伴ふを得ず大抵は破産に瀕した事で

あつた。その少し前に於て江戸よりは討幕の軍勢先づ芝口に會戰あらんとの故を以て芝口本店の家族達が來て暫く避難して居た事もあつた、たゞ此間に處して吾祖父は誠心誠意其道を誤ることは少しも無く、且つ當年の鴻恩に報いるを得た事を難有考へたといふのである。此事は現今も折ふし吾母に聞く處の近き事實である。

◎祖父は年六十二にして此複雜なる煩累の將に惡傾向に一轉せんとする時に中症の爲に沒した、未だ幾月を經ざるに相續の任たる吾伯父も病沒し去つた。其後幾年も過ぎぬに妻子達迄も病難や水難等で亡くなつてしまつた。この間の俄然たる悲慘は村人も衷心驚愕して深く哀悼せられた事であつた。

◎是時よりただ吾祖母と吾が父と（父は二年ばかり前に離緣の故に吾家に歸り居たるなり）。朝となく暮となくたゞ消極的心配をのみ重ねて、世間よりは家のあるかないかの如く思れた時である。

◎謠俗ノ被服飲食奉レ生送レ死之具也。これは史記貨殖傳中の一句であるが、吾が埴谷杉造林の業は祖先より吾に及び五代而して漸く多少其成績を語ることが出來るのであるが、思へば民間の小造林は其効績を擧るに至ることが實に容易ではない。高山大川の國に於て大仕掛に經營するも容易では無いが都會に近き此千葉縣あたりにして之を繼續することの難きことと亦是一の守成難である。故に單に所謂被服飲食的や此上總あたりの舊習慣で嫁壻の某々祝宴

が大振舞であつた、兒供の節句の祝餅や凧擧げなぞすばらしい騷で賑やかであつた。某々の家の葬式は村始つてからの大供養であつたなど〻評判中に林木の消費大半にして過ごしたならば、誠に今吾が心に於ても別に淋しき感じに堪えぬのであらうが不幸か幸か、それ以上の事蹟を以て我が所有森林の半は消費變形し亦無形的利用に到つたのであつた。かく客觀的にも思慮を廻らし、以て彼田地持や濱の網引旦那といふ人々と其經濟的經營を異にせる事を靜に考ふるのである。

◎茲に於て造林の方面は如何と稽ふるに嘗て曾祖父の酒造業は最も隆盛に達したる頃、其業の流動的なるに慮りて固定的なる造林

の事業をも經營を盛にしのであることは略前に記せる如く、先祖の時旣に創めたる基礎のこ〻に漸く建築成立の曉に及だのである。

◎されば樹苗移植の時機は如何なる家事上の煩忙ありとも急病人や死亡等に非らざる限り其季節を過さざるやう適當に之を行ふて其當時發明せる挿木仕達の苗を以て盛に造林をしたのである。それは大抵例の杉木であつて其杉木造林の好成績が即祖父亡後我家の大難を支ふると同時に吾が家創業の恩義ある芝口本店方に對して聊か報德の微意を表することを得たのである。また領主の淪落に際しても曩日に變らず忠誠を表することが出來たのである。其の他は各方面の親戚へ其の時勢の變遷に因りて發したる身上病と

も云ふべきに、其の藥として進呈したこと幾十數回であつた。如斯時勢に若し我家の經濟も他と異ること無き身上的に有之しならば亦均しく破産の止むを得ざるに終るのであつたのであらうが是偏に森林の功力に外ならぬのである。然して此經營者の心と森林の赴きとが自然一致の念慮を得たるは亦神明の加護に之依るならん。

◎斧斤以レ時入二山林一材木不レ可レ勝用一也。

要するに都會に近きこの土地の山林家は所謂名譽の慾、女色の慾投機的の慾、村で意張りたい慾、先づ此等の四慾を滅して靜に天然の趣味を考ふるを以て造林主の第一義とする處であるのだ。

◎先づ以て我家に於ては此等の慾故に造林を害ふことなく、造林以來凡百數十年誠に之を造り之を有功に致すことを得たるを深く天地の神に感謝するのである。

◎どうしても造林の事業は米麥を作るが如く年々歲々の仕事として成績を見るわけに行かぬゆゑ、そこで所謂はづれもの横着者なまけもの、みえ坊、等が女壻に來るとか生れるとかすれば最初は何も法律的の罪でもない事だからさ程にも害を及さぬ樣ではあるが、はづれッ兒は火事より怖いの譬に漏れず、あたら生々たる彼の森林美も一夕の無駄消費に歸して仕舞ふ、聞くだに無慙なわけである。

◎百戰百勝一忍に及かず、これは古來の格言であらう、外祖父の家の屛風に貼つてあるのを吾が文字を知れる頃より行き見る毎に考ふる事であるが、そうして祖父の逝去後、吾が父の唯一忍百難をしのぎ、斯造林に於ける危險街道を無事に經過するを得て。

◎天さかる鄙の一農民とし幾分でも亦是大みたからの末なることを自覺して世々其美を濟すの誠衷を表現しつゝ行くことが出來ると思ふのである。

◎埴谷杉造林法の精神及其用の極致亦之百年實歷の上に磅礴たるものありと思ふのである。

(四)人、風俗、教育

◎大凡人間は、海山川澤丘陵原野人家等總て些細の處までも地理とは深き關係の因緣にて種々の風俗を生じてくる、其風俗の色々なる、良否に賴りて、譬へば林木の如く即ち天然林や人工林や其生々發育して永久的に存在し幾世かけて斯美趣味を濟して榮ゆるのと、之に反して往昔武藏野の篠薄の荒凉たる如く亂伐にして唯商人的利を之重じ森林美との別離を輕ずるとの二途になりゆくのである。吾が目には山林の木立を見即ち林相を視察するも社會の

人間違を見又人相を觀察するも同じやうにも見えるのである。

◎昔の陰陽五行説を迷信するのでは無いが、其説に金木を剋すと云つてある、其理はとにかく今木材屋が金を持て來て、どうぞ木を賣つて呉れと繰り反して謂はれると遂に林木の幾本か幾百本かに剋されてしまう、樹を育てる方から視れば他に然せらるる時は大抵森林の爲に宜敷はない、けれども仕方がない此頃の（大正四年八月）やうに税金は上るとも下らず米も麥もひた降りにさがれる時節には農村の林木は生活上と二つで大牢みつがれて仕舞のである。税務署では只伐採さへ多くして所得税さへ已が管區内で增加せば好いと思つて居るかは知らぬが。是は忌むべき惡傾向である。

この惡傾向が續けば民間造林は大概無くなつて仕舞ふ

◎今の處では實際へタにすれば大方皆税金に納てしまうのである（此詳細は別に調べて御目に懸けたいが今は大體に記す）税金に納めるは勿論國家の爲めであるが、それだけで終つては民の自家並に斯林樹に何らの光彩もない、光彩なければ美がない美なければ殺伐になる、所得税調査委員などには能く此道理を考へて貰ひたい、彼税金、升の隅を楊子で洗ふのは國家の爲め良く無い、苛政は山の中の虎よりも畏い、

◎吾が外伯父、二言目には則曰『酒の税醬油の税や煙草税贅澤税で山が泣く税』どうだお前等も今に身上持になると贅澤税で山を

泣かせない樣にするがよいと吾が年少の頃から屢々此警句を聽かせられた。

◎其頃は明治の、世は國會が開けた、今度は日清戰爭の大勝利だなどゝいふ頃の風俗を深く觀察して吉井伯父が私に何くれと敎へてくれた前置の言葉である。

吾が幼稚の頭腦にも覺えて居る彼の黨派騷ぎの影響は又林業に甚しい害を爲したものであつた。頃は明治二十二年であつた吾が歲十四の時である、縣會議員選擧の競爭が激烈であつた時、某の黨派が小旗數旒を押し立てゝ隊伍をなし選擧場指してやつて來たのを小學校の庭で見て居た事がある。家へ歸ると父に聽かせられた、

『今日此頃は旗まで立てゝ大騷ぎをして黨派を爭ふて居る、あア云ふ仲間には決してなるものではない、どつちの黨にしても同じことだ』此時吾が父は其子の頭腦に黨派といふ事の將來かけて厭になる樣に先づ一切の惡い感じを私に細しく聽かせてくれたのであつた。

◎自由黨、改進黨、村の某々は自由黨何區の某々は改進黨で余(父)に對ししか〳〵誘惑に來た、其後何村の者で嘗て朋友の誰々が又誘ひに來た、又村內の某々は自家の勢力を張らうとする爲めに何黨をやつて居るのだ。彼はかう云ふ人物である誰はさう云ふ人間である、一切漏さず此時の事柄を始めとして我村の村會議員の狂

言的村會をやつた事や其他種々雜多に黨的の運動者に困らせられた事等を聽かせられた。其後日にも折ふし誘ひに來られて窘む度毎に、未だ年少なる私にしか〴〵と聽かせられたのであつた。且つ訓戒せられたのであつた。

◎其頃特に幸なりし事には、小學校の先生で篤學の人が居逢せた歷史や數學を好んでそして年長生徒には能く奬勵して國史略、十八史略、等を敎へてくれるわけであつた、秋も蟋蟀の鳴く頃になると夜學會を始めて歷史に加ふに數學を盛に奬められた。吾が頭腦に餘程緊張（シマリ）の就いたのは此御蔭が要點であつた。誠に斯人の子の爲めに心配して吳れるものは親と師との心である。今日私が私立塙岡農林學校を建設した精神の一般は實に玆に始まつて居るのであります。この時私は敎へられる通り能く勉强した。今一家の業を務めて居つて横着氣の催す時は當時の氣分を遠く呼び起し近くは根岸の先生の時を考へて鞭韃自彊むるのであります。

◎私の父は末の弟であつて一旦他家へ女壻となり數年後故あつて生れた吾家へ歸り來て一轉して幸に生母が一生一代の心配を慰籍するを以て其務として而して一家の難儀に當りつゝ在つた最中であるから、彼の運動者といふ者らは一寸した動機で吾が父を所謂心機一轉せしめて一つ員の字や何かに擔かうとした。されば慰安や名利や名望や隨分手をかへ品をかへて誘ひ出さうと來られたの

であつた、それを悉く斷つてしまつたそれ故、
◎隣村の日向村あたりでは吾が父の事を『猫に袋の旦那』だなぞゝなぞ的の評をして笑つた程であつた、これは數年後は吾が親戚より一笑話に聞かせられたのである猫に袋を冠むせると同樣何にもかも後じさりするといふわけだそうである、これは出しや張る人間によい參考言だといふて聽かせられたのであつた。
◎父は青年時代に漢詩を好み、之を以て困難中の憂心に唯一の慰籍として居られた即ちそれを例の誘惑的朋友の來た時に應用した事なぞ私の耳に今も殘りて居る。

萬事無心一釣竿

三公不換此江山

等、山人の薯境是の他はないなど云ひつゝ夜一夜自分は吞めぬ酒のおつきあひをした事も随分あつたのである。
又自由か改進か何れが好いか入黨せすとも見識を聞かせて與れなどゝ迫る者もあつた。

問余何意棲碧山　笑而不答心自閑
桃花流水杳然去　別有天地非人間

などは幾回もただこれ等の詩ばかり誦して居た處が大抵あきれて辞去したそうである。それではあるが村內の某々氏らにヤンヤャンヤと日も夜も來て役場員に爲やうとの時は、實に鬱陶しく困つて

仕方がないから老母の事を話して李密の陳情表まで讀み出さうとした事もあつたそうである。

◎今より考へると餘程滑稽的でと思ふ人々も多々あらうが、其今も村の情實とか黨の情實とか云ふものを少し考究して、現今の狀態に鑑ば未だ吾が父の決して滑稽的に非らざるを知るのであらうと思ふ。

◎一寸のくだりを以て吾が父と造林の意志とを記さんとして婷もなく走り書きになつてしまつたのではあるけれども、吾が祖先以來所謂九仭の功を、其殘れる一簣を父に依つて此の森林は漸くに出來上つたのである。その場合に於て方言の「美い山は蟲が食ふ」

此害蟲の豫防に一意專心に勉めて風俗の逆まく中に於て存在を强固にするを得たる其百分の一を記して見たのである。

◎今の青年が造林家となりて少くとも三十年間の心棒を維持する時は更に吾が父に十倍した誘惑と戰ふのであらうと思ふ。先づ種々なる柔弱文學の小說的誘惑を初めとして日夜に斬新なる誘惑に遭遇しつゝ行くのであるから、茲に先づ吾農林の子弟に物語ると同時に自ら戒めて父の勞苦に報いるの一端とするのである。

◎金、人を剋す、彼の金圓的誘惑には、國家に於ける柱石の大物が一夜にして倒れる世の中であるから、實に金の剋する力は恐しい。ただ獨逸の大砲のみ恐しいでは無い。

吾かひとり木の種まけは手底に
そのおさる音土につくおさ

礎山生

民間造林の中より（後編）

垣谷杉造林法

はしがき

◎本編に於ては聊か農林實業界に益せんとして實際研究したる處より申さんと思ふ、先づ隗より始むる次第なり。

◎數年來の流行、全國到る處、杉苗の赤枯病で未だに困難して居るとの事であるが、此れに就ては大正六年に新潟縣に於ける大日本山林會大會の視察旅行團か佐渡島へ行つた時、島の中央部なる神社の風致林に於て、本多博士の多方面に渡りて講演のありたる時、山八は或る會員が博士に質問せられたるを見聞して、我が千葉縣山武郡睦岡村及び日向村、源村、豐岡村等にては、杉苗を『さしき』の方法によりて之を作り、以て造林し、その造林には、たとひ二三年生の小なるにても、又さし木苗圃に於ても、未だ嘗て赤枯病には侵されぬ由を記して、同博士に申述し、且つ將來共安全なる見込を附言したりしが其後三年目、今大正八年一月大寒の候に、そちこち見あるいても、其病に侵されたるもの無きのみならず、昨大正七年に於ける睦岡、日向、源等にて斯の挿木苗の賣れ行は實に三四年前に三倍して少く考へても三四十萬本は二年生苗にて賣捌けたとの事である。

◎それ故杉苗と言へば、さし木、に限ると稱賛する聲のかまびしき間に、本縣各郡の有力家も團隊旅行の途次立ち寄らるる事幾回も有之程に相成つた。

◎然る處この頃、安行邊にて、さしき杉苗が支那より到來した物であるとか稱して廣告本に見えてあるが、之は恐らく源村や睦岡村より或苗木商の手を經ていつ

たものではないかと思ふ。それはさておき。

◎是此挿木苗を以て造林するといふ事が實際に出來上つた場所、即ち林地を篤と觀察の上でなければいけないのであるから今小し此處に逃べんとする要點はそこの處であると思ふ、言はゞ一見の光榮を得たい。其所以を略記するに外ならず。

(一) 苗を作る方法

◎埴谷杉さし木苗の上等物を仕達る方法。といふは今それ〲挿方はあるけれども、從來の通り、三年目にして林地へ移す（定植）ことの出來る拵へ方が總ての點について好い處があると思ふ。

◎先づ風の吹かぬ日に山林へ行つて小杉樹の、定植後五年乃至十二三年位を經たる木にて、幹及枝葉の繁茂宜しき物の中より其中枝の秀でたるを長さ一尺か八寸位の處より、鎌又は鋏にて刈り取る、一杉樹に付き三本乃至六七本は取り得る。（より多く取得すれば其樹を害する、中枝以上の處を取れば最害をのこす）當今

此樹を畑地の陽光宜しき場所へ苗取用として垣形に仕立て置く程に進歩して來た、是は山林中へ歩き廻る面倒も無く時間も早く、且つ苗木も力ある物を多くする事が出來、一擧三得の効がある。

◎此苗木とする小枝即ち昨年度に成育したる物にて八寸乃至一尺位の枝(今春に挿すとすれば一昨年に育てる處を一寸或は五分附着せしめて置くが必要なり)を、切出小刀にて切口は斜形に又は三角尖頭形に切り、切口より三寸程は小枝葉を皮目より取去りて置く、これで一本出來たのであるが、一本一本丁寧に揃へ、百本束として盥に水を汲みて其の切口を浸し、日光と風とを避くる爲めに養蠶蓆の如きものを覆ふて置くのである。

時間は苗圃へ出すまでの間に(尚多く揃へる爲めで)あるが、一晝夜位は宜しい、浸す水は川の水が宜し。此の水へ漬ける時に枝苗の大形は大形にて揃へ小形は小形にて揃へ、水は枝苗の半程に及ぶが宜しい全部浸すはよく無い。

◎苗圃は、粘質壤土、腐殖質壤土を宜しとし。其他大抵の土質でも出來るが、海邊の荒砂質と、山地の岩石質とは絶對に出來ない。

位置は東面して少しく傾斜したる處が第一である。次が南面して箕の如く凹形にして水分の停滯せぬ處、即小傾斜が宜しい。何れも岡を背負ふて居る處である。

小岡の頂きなる平地も宜しいのではあるが、此等の場所は、樫の木やカナメ樹の生垣を南邊及西邊に造りて先づ日避と風避けの用意をする、高さは約十尺位でよからふ。是は炎天打續く時乾燥の爲めに枯死せぬ用心であるから、水分少き南面傾斜地へも必要である。

◎それから今は、岡のそちこちに一度開墾して畑地と爲したる處へ、杉苗を定植し、そこで五六年より八九年を經る間其樹の枝を取りて、直に其畑地へ挿す方法もある。之は風及日光を避け一方には母樹の爲め水分の供給をよくし、手數も省ける等の便益はあれど、陽光を受けた好い物は出來ぬ。

◎次には丹冊稲苗代の如く苗圃を拵へ其れへ凡そ四五寸角形に苗一本一本の面積へ與へて一面にさす、それを翌年は麥畑の中へ移植して育てるといふ方法も出來た。此は新に行つて見るもよい。

◎苗圃の位置が定り、蔬菜畑の如く丁寧に深く耕耘して平面に土地をならし、凡そ麥畑の畦形位にして、それへ藁繩を打渡して其繩共足袋跣足にて和らかに踏みつけながら、其蹟の繩の直線形へ苗間隔は五六寸位さして挿しつゝ後ずさりして漸々に挿すのである、深さは三四寸でよい、さした後、苗莖の根ぎはに風と日光とが、はいらぬやうに麥作の中耕をする如く、やつて置くのである。

◎此挿方は埴谷村にて（舊幕時代）凡そ百二十年前に始めたのであるが、近く二十年前まで、此苗圃は一定の地面の外には出來ぬ事に思ふて居たのであつた。今は前記の方法により丘岡地の各所へ多々設くる事が出來る。

◎この從來の仕立方へ改良を加へて拵へれば、其年より三年目にして林地へ植ゑる事が適當であるが、培養が行届かぬとは四年も五年も經て善い物が出來ぬ。それ故、さし木の事結了後には、毎月一回位中耕をして、雜草に甚しく出られぬやうにする、雜草が出たとて扱く事は不可なり。中耕の際に鍬さきが苗に觸れても不可。土用の炎天には、篠や雜木の枝葉を立てゝ日避をしてやる。（地面の好適地

には其要は無いが）。苗圃の肥料は好き地面には要らぬ、地味わるければ、腐熟せる人糞肥料を與へるのである。

秋季彼岸になりて漸々除草をする、此間にあまり草茫々となれば、小鎌にて刈り置く、何でもさし本苗の根本が土と共に動搖せぬやうにするが肝要である。

◎秋季に一度掃除。即除草其他日避物等を除去して、今度十二月の初旬に冬ごもりの用心をする。寒氣の強い土地では早くと急くべし。先づ藁しぶを覆ふてやる又其上へ篠笹をおほふもよい。上手な人は何も要らぬと言ふて居るが、それは一般的には駄目である。

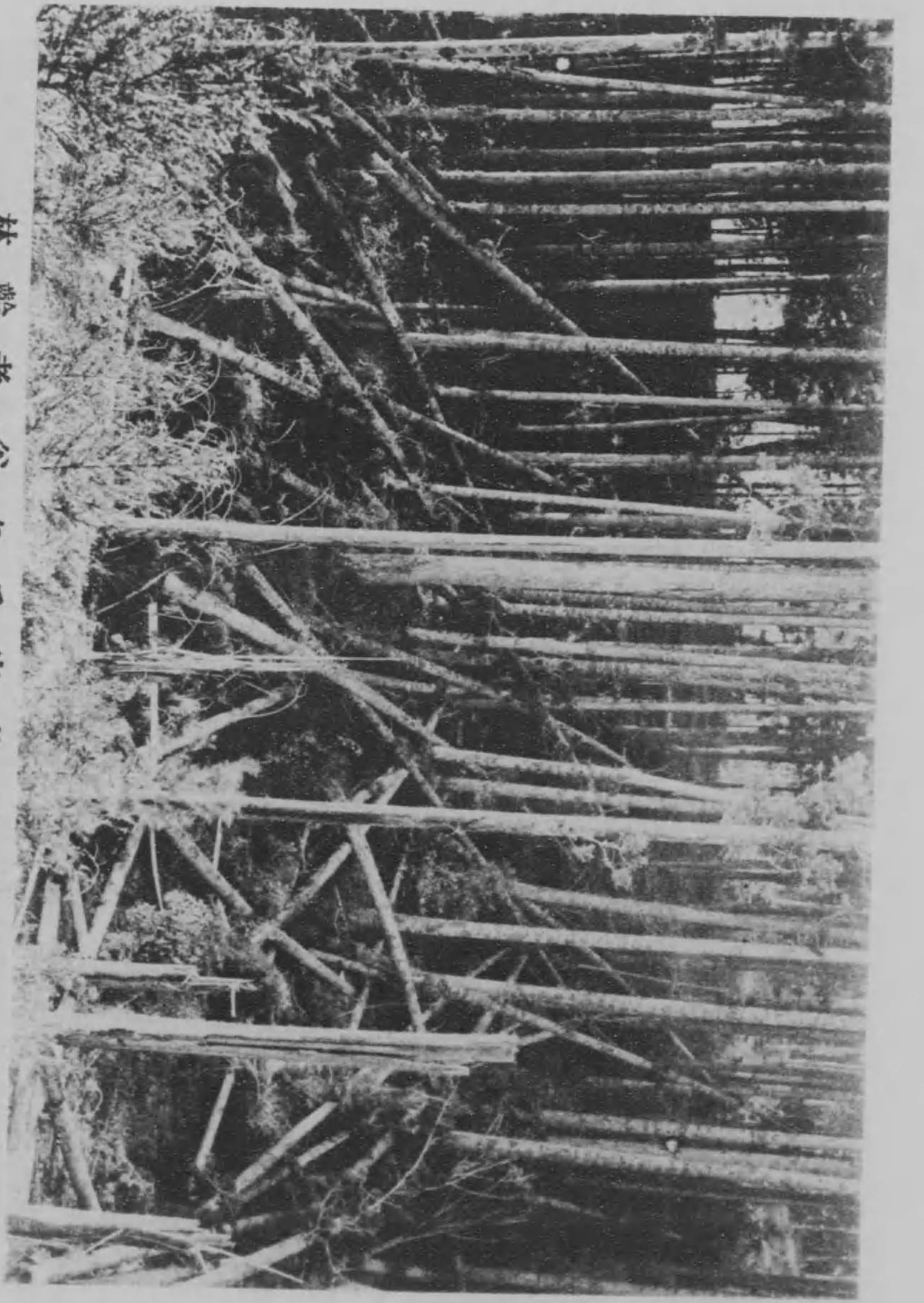
◎翌年は（二年目の春季）何でも荒草の出ぬやうに、例へば大根畑の如く清々と美麗にして、中耕をば此年五六回も爲す。二年目の冬季には何等の世話を要せず經過してよい、但し雪の後は根本の土及苗の曲りを直してやらねばならぬ。

◎かくて三年目の春夏の交に於て林地へ運で定植するのである。千葉縣の北部地方では四月二十日頃より始めて五月の十日頃までの間を宜しとおもふ。安房の方面は十四五日早きがよいと思ふ。茨城方面は一週間位遲くても宜しいであらう其他推して考ふればよい。要するに八十八夜を中心點として順應するのである。

◎それから、苗樹を畑地より堀出す時に、毛根に含まれたる土は半ば存するやうにする、根は日光と風とに一時間以上當てる時は枯れる事が多い故、荷造りするまで假に其畑土を覆ふて置くのである、

春花の櫻はあれど秋綠杉ぞいかしき
大人の德想ふ
あしびきの山人吾は人も樹もその
美しき同じと愛でけり
今そだつ盛青年に立ち競ふ眞杉と
二つ生々しもよ

礎山生



睦岡村植谷字瓜ヶ谷の老齢林
(明治三十五年九月二十八日暴風雨被害)

明治三十五年九月廿八日暴風雨被害地の中字南出崎の西北隅
前面に太く寫りたる木は隣山の分なり（凡二十本位）

(二) 林地の選定

◎所謂埴谷杉の優良なる物を造林するには林地の選定が實に第一番に肝要なる所である天の時も人工の努力も、斯の地の理には及び難いといふ。それが本當であるから（森林植物帶の理）今其理により茲に短縮して、更に陰陽の理を植物に考へてそれを記して見るのである、されば言ふて何も難かしい事を云ふのでは無い。

◎天地自然が斯杉樹の育成にも心配する處を觀て其眞なる狀態を察して覺えるのである、此等の事は金錢的で覺えられぬ。

◎そこで、さし木杉苗即埴谷杉苗は陰樹であるゆゑ、好む處は北面にて水分も宜

しくして緩かに傾斜せる地が適所である。次に東方面及東北面等傾斜及水分の同様なる所、但し北面は大抵水分あるなれども地味又は斷崖等の爲めに不適當なるもあり）を好しとす。次に南方は箕形の如き凹地面なれば水分の供給も隨て有之爲めに、陽光に對して其美を發揮しつゝ成育する。西面及西南面、之も水分の供給あるは兎に角よけれども、千葉縣の如く西南風及西風の多き上に乾燥に苦しむ地位等では大抵は不可である。とりわけ炎天の打續く年など午後の乾燥に害せられて其結果は之を東方面に比して三分一位の生長率であると思ふ。次に西北方は傾斜が北面に廣き地形であれば、北方の如く好適である。それから南東方面は東方面と同様にして凹形で無くとも宜しい。要するに其名の文字に示せる如く埴にして谷なる處を好んで成長する杉樹であると思へば大抵間違ない。（茲に埴といふ赤土のチバリけある物を指す）

◎そこで丘岡の上の平地なる處は如何といふに、あまり平面なるよりは盆形に或は盥形にして周圍が小高い處が宜しい。しかして此丘上平地は南面傾斜地よりも宜いのである。されど北面及東北面傾斜には及ばない。

◎上述の地形は實際研究と共に地味と相待て出來る事であるが、水分の關係に最も氣をつくべきであると思ふ。

◎我縣下に於ては、睦岡村の埴谷にして既に百數十年來挿木造林の成木を見つつ、茲に山人の家にても曾祖父以來四代の經驗を殘せるものである。然るを明治三十五年の大風害及其後再三再四の風害等の故に半以上の破損を來したり、されど一方には材木材質の實驗を試るを得て、不肖の山人も二十年ばかり斯土地に親

しみつゝ、山人と杉樹と此適地とは、深い中になつて居る吾が頭腦の趣味を記すのであります。

◎大凡此千葉縣の地理上に於て、海岸を隔たる一里位に在る丘岡地には、大抵前記の方位面に依りて定植する時は好い物が出來る事と思ふのである。

◎然し茲に極めて要用なる物が一つある、それは黑松苗を杉造林地と爲すべき處へ十年以上二十年或は三十年も、早く先づ定植して置く可き事である、斯松木は黑松にせねばならぬ、それが一反歩に付百本以上二百本位整然と植ゑてある林地に於ては、乾燥に困る西方面と雖も良く成育する程であるから、何でも地味の惡いと思ふ處へは松林を造りてから二十年も經て後に、斯挿木杉苗を定植する事に爲るが宜いのであります。埴谷に於は之は隨分能く實驗したのであります。

◎次には、一回充分に繁茂した杉の森林を皆伐した跡である。此所には亦更に黑松苗を植ゑて、十五年も經て後であらねば不可である。北面の地味よき所にても水分の少き林地である時は、黑松苗を植ゑる事が肝要である。

◎此杉山皆伐の跡へ松を植ゑる理由は一寸例ふれば、蔬菜を作るに或種類に於ては、連年作を厭ふが如き（茄子畑の經驗に似たり）物と思ふ。

◎かく言ふと農村人の或者は事更に臍を曲げて植ゑた者があつたが、皆ダメであつた。然し五十年もそうして置く間には漸々成長もすべけれども、如斯瘦我慢は年數に於て人工造林の目的に反するのみならず大に損をして居るのである。

◎先づ二十年は松苗を植たまゝで置いても、それから後に杉苗を植ゑて本當に良杉樹が出來るのである。

◎又杉苗黒松苗同時に植ゑるといふ仕立方は是は未だ十年程前よりの事で、成木は見ぬ故判らぬ。松を植ゑて五年位の處では杉苗があまり細々として育つ。面白くない。

◎先づ斯の木を植ゑると言ふは百年計畫であるゆゑ、如何にしても造林主自身が忍耐を地面に伏して（苦勞しつゝ）せなければならぬ。どうしても其れでなければ一般に良い杉は出來ない。

◎然し、北面、東面等にして水分の供給も自然的に好き地所には黒松樹定植の必要は無いのである。

◎古來埴谷に於て、性質温良にして玉の如き美杉樹の用材を生ずると言ふは誠に能く松（黒）樹林中へ植込んで在る事が與つて其美を濟さしめたのであります。

（三）苗木選擇及定植法

◎前號に於て林地に關する要點を詳細に記したれば、今回は時節柄苗木と其林地へ定植の方法とを記述して見むと思ふのであります。刻下の山人は毎日々々斯樹苗植に勤勉して之日も足らずとやつて居る其際に筆を執る事は身體の疲れの爲めに稍もすれば判りにくき處もあらんかと察すれども、そは讀者諸賢の御質問に依りて御答かた〳〵更に記し訂さんと存じて居ります。

◎埴谷杉苗は將に林地へ定植せんとする前に最も注意して良苗を擇で揃へる事、他の檜や松などの苗よりも注意を要するのである、一体杉樹の性質は、皺壓、壓

迫を同種類若くは陰樹性を帶びたる樹木より蒙ることを忌み嫌ふこと甚だしい故に、同時に植ゑる苗木にしても少し大形の傍へ小物を並べて植ゑる時は何年經つても、壓せられて仕方が無いのである。

◎されば定植の際には、自家製の優良に出來た物として自畫自贊しつゝ居る品でも、其中に就て、上は上揃、中は中揃、下は下揃として之を三通り位に擇ひ分けて、是の三階級に對して其地位を與へるのである。苗木商より買入分は一層注意して選擇すべきである。

◎其擇び方は、先づ三尺以上三尺五寸迄の長さ（根元）の苗にして根には毛根多く、其の枝葉は疎に過ぎず密に過ぎず、幹は中正に出來て居る物、（此は人々が徵兵檢査などにても同樣で、中肉中背者を步兵として多數に要するに似て居る）故

明治三十五年九月廿八日暴風雨被害地の中字荷出崎の西北隅
前面に太く寫りたる木は隣山の分なり（凡二十本位）

に之より肥大なるもの又は長く延びたるもの等は、長さは風に負ける、肥大にして根ばへ少ければ又風に倒される、尙日光の直射に對して水分の供給がやりきれぬ、定植の際少しく疎漏である時は忽ち枯れてしまふ。されば大苗は五十本か百本位別段念入に植ゑる人々の外は好まぬ苗である。

◎前記の中正的なる苗を上等品とする、それから中正品といふは、根はふさふさと有つて脊の短い物、幹と枝葉の揃ひは中正的でも根が少々缺損して居る等の物である。下等の品とは幹の曲りたる、幹細く枝葉の瘦せ衰へたる、苗圃にて同類や其他の物にて被壓となりたる等の品は皆下の分に入れるのである。

◎先づ大体この三階級として是を定植する地面に就てが、最も肝要である、脊の高くて細いのは北部谷形の下方へ植ゑ、根が好くて短いのは南西方等の風當り多

い處へ植ゑ、下等物は、北谷形の中段より上り口へかけて植ゑ、中正的の上等物は、平地面及東方傾斜面へ植ゑる、南面傾斜へも之を植ゑる、西方傾斜面へは、下等物を更に苗圃にて假植し根を強くしてから植ゑるが安全である。上物は何處でも好いのであるが、上物ばかりに出來やうがない。別段に長大なる苗は（相撲取の如き体格とも稱すべき）先年植ゑて枯れたる間へ一二年後となりても之を植ゑて其缺位を補ふに極めて良いのである。是を植ゑる時は庭園へヒバなど植ゑる如く極めて念入りに植附けねば枯れる恐れがある。

◎次に埴谷杉苗の植附方法は、植ゑんとする處《前年冬期に下刈するは勿論》の地面の小篠笹や茅雜草落葉類等を鋭鍬にて方二尺角位に掻き除け、手早輕く鍬を打つ（輕く打つは林地の表土が三四寸は種々の根にて緊縛せる如くなれる故也）

植穴の大さは、深さ一尺より一尺二三寸位にする。面積は一尺角又は一尺五寸位の直方形にするも宜しい。表土は四五寸位の厚(アツミ)に堅くなり居れど五寸以下一尺と深くなれば大抵は軟かである、笹根や芝草根で固まりたる土は先づ植穴の前手、自分の鍬の手元へ打寄せそれから軟な好い土をだんだん堀出して其上部へ置く。岩石の稀有なる千葉縣の山林地の土壤は大抵軟い方であるから植安い。

◎それから植ゑるには、先づ移植鏝の大形なるを用ゐ、穴底の土を小突につゝいて柔かにし、左手に杉苗を持ちて植穴の中央へ樹てると同時に自分の位置は堀置ける土を右手にして、即ち軟な其土粉を苗根に含ましむるやうに入れる、穴の半分位に入れた時、鏝にて輕く根へかけて其土をつゝく、足の爪先にても輕く踏むやうにして稍堅める、尚軟い土があれば穴一杯に入れて其上は最前の篠芝等離れ

る荒土を搔き寄せて、苗の幹が風にて搖れても、日光や風が根部に直通せぬ樣にし且つ炎天に際して乾燥せぬ用心をする、是で一本植ゑて了つたのである。

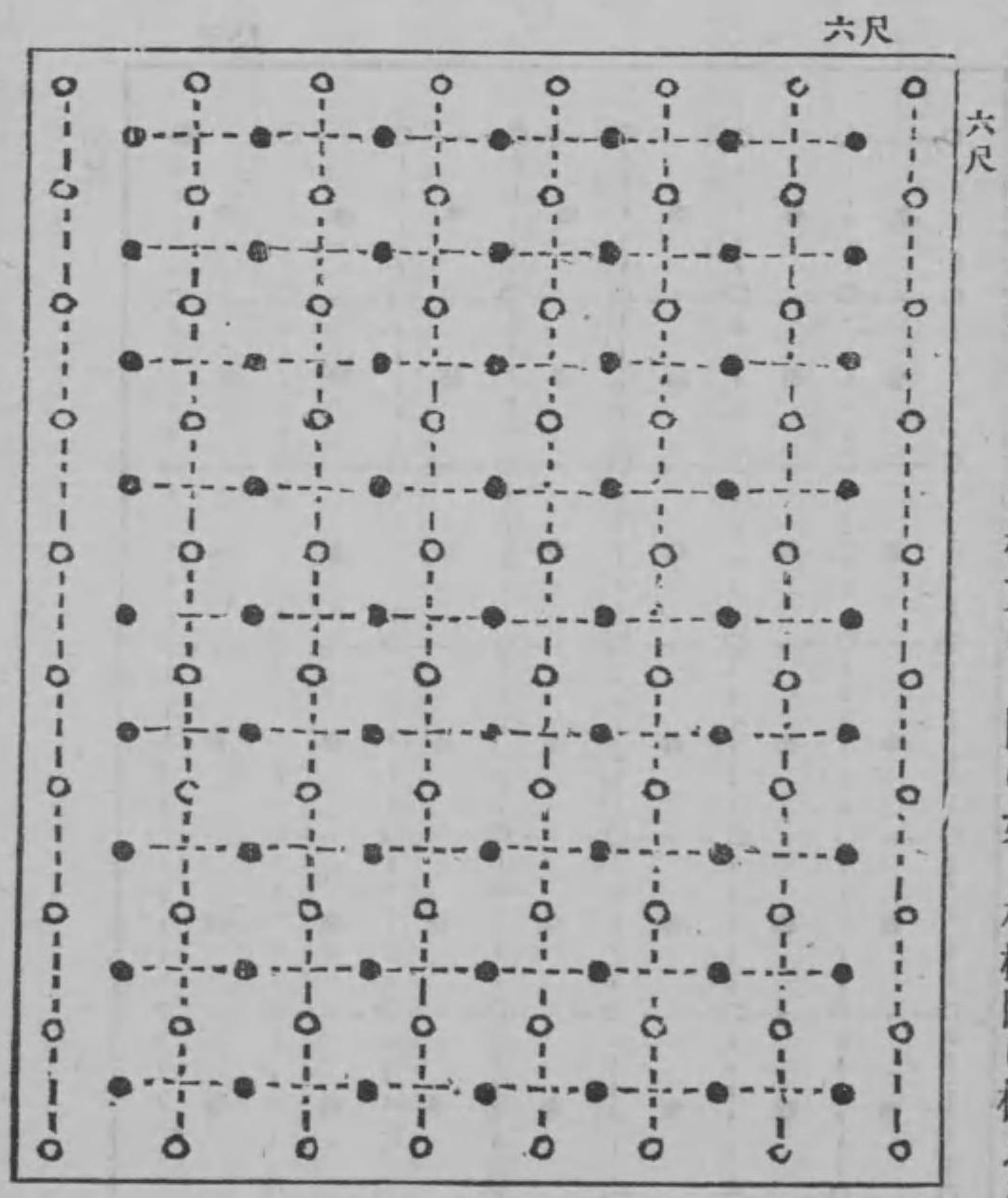
◎如斯にして根氣よく何百何千本でも丁寧に植ゑるのであります。慣れて見れば、面倒などといふより、趣味的に面白くなるのであります。

◎次に一反歩に就て苗の植數は松樹が二百本乃至三百五拾本位ある（圖の如き配置に）處へ二百五十本乃至三百五十本位植ゑるのである。但し松樹の存在は整然と一坪一本にあらずとも宜しい。

◎植樹繩の用方は各自、其林地の肥瘠に考へて、早く育つと思ふ場所は、畦間距離も苗間距離も大きくする。生育の遲く思はるゝ（隣地等の狀態を見て）所へは其距離をせばめるのである。

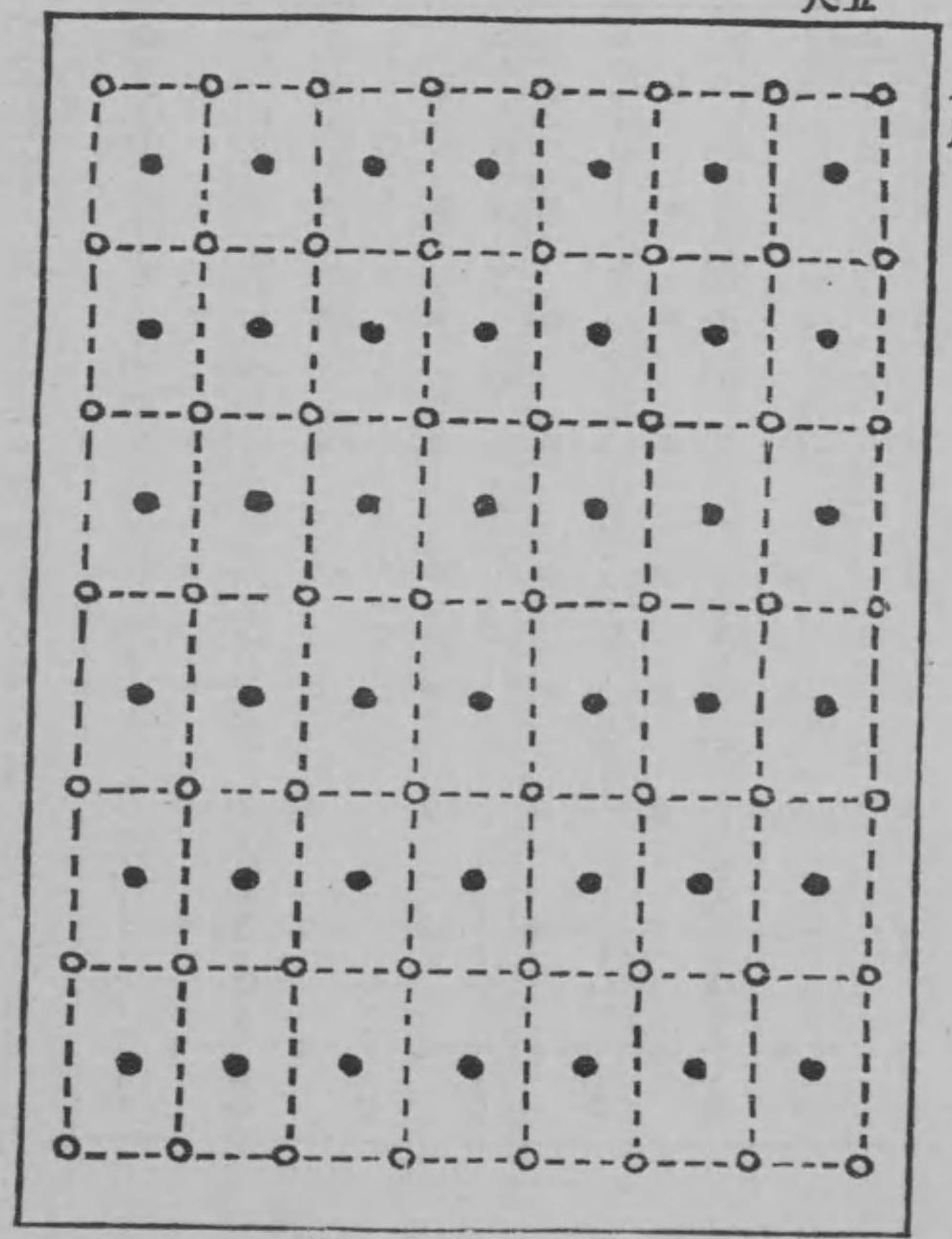
◎今一坪につき杉苗一本としての植方は。圖の如く松樹間に植ゑるのである、

第一圖



備考
○點は松樹、
●點は苗杉。

第二圖



備考
○は松樹
●は杉樹

◎そこで、一坪一本といふは、埴谷に於て多數の人々が植ゑて居る、之は普通で且つ正方形植樹の式である。

◎直方形にしては第二圖の如く畦間距離を七尺として苗間距離を五尺として植うる時は三百八本植ゑる事である。

◎植樹後、下草刈、枝打等の要點は次回に讓り今は事のついでとして、一寸擇伐又は間伐の都合を附記して置く、それは此圖の植方では十五六年を經れば大抵は樹々密に過ぐるやうになる。そこで、松樹の曲りくねり物を先つ伐採して（松樹を伐るには其枝を大概切取して後に倒す）次に尙杉樹生育の早きが爲め密に過ぐと思ふ時は一本隔に伐るとは限らずに、何でも劣等なる物を擇で除伐するのである。

茲に劣等なる小杉と雖も、彼の實生小杉に比較すれば苦竹(マダケ)の如くすぐ〳〵として居るから、其用途は隱居向の小庭敷二階板のさほぶち、庇のたるき、又茶室へも同樣に用ゐらる。優等なるに於て其用枚擧にいとまあらざる程なれど、後日埴谷の木材を記す時に詳細を考ふべく、今は植樹の餘談のみとする。

(四) 森林保護の事

◎茲に森林保護といふは單に之を守るといふ意味では無い、譬へば、小學校の先生達が兒童を訓育するが如く、正心誠意面倒を見ると同樣である、其發育を助くるが爲めに訓育するので即其發育の爲めに保護の種々なる丹精を以てするのである。さて既に林地へ良好なる定植が出來たとすれば、そこで其後の保護が實に苦勞の種である。宛然入學した一年生の如く弱いものであることを、思へば山人も亦苦勞性である。

◎大凡先づ國法の完全に行はれる國で、風俗醇厚なる村落に非らざれば良林美木の無い道理となるのである。其れ故火難盜難等は是非警察の力を以て保護していたゞかねばならず。そのほかで、風の難は造林者の注意綿密なれば、其半は耐へ得るものである。水難はと云へば、その事は保護を善くすれば之無いのみならず、却て他の田畑や、人間の事どもに對して、こちらから保護してあげるのであると思ふ。

◎それゆゑ、盜賊がそこに居るでも無いのに、警察々々と(森林法)最初から考ふるはあまり早手廻しの樣ではあるが、是はやがて前記の通り、人間生活の保護

をもする事になるのであるから、斯く記すのであります。

◎次には、定植後、其の生長宜しきは四五年目にして枝取をする大方は七八年目であるが十年も經てから之を爲すは、少々何らか都合の惡い事がある故であらう。十年が十數年たつても枝取の事は慥に効力があるは明で、是非行はねばならぬ事である。之を第一回の枝取りとする。次には、二十年前後の時に林木は既に苗木と云はるゝ時代を通り越して、若杉といはる時である。枝取りは此時機即ち二回目が極めて肝心である。

◎今春來、吾村等でも、所謂補習學校を設置して、小學校卒業後の青年にして、二十歳に至るまでの者を悉く集來せしめて、之を所謂補習教育的に訓育すると言ふのであるが、斯の樹の枝取りと言ふは、それによく似て居る仕事である、(此位

に譬へねば村村の守舊的山持連は承知せぬかと思ふてかくたとふる)。

◎單に樹の枝取りといへば頗る單調ではあれど實際はむづかしい其樹の生長力と土地と、土地と風力のあたり加減等まで、深く考へて後に之を行ふのであるから、埴谷杉に就ては、誠に大切にして、必要なる所以である事、一度實地について未だ見ぬお方に御覧に入れたい。

◎それから第三回目の枝は杉樹が、胸高周尺として凡そ二尺五寸乃至三尺位に到達せる時で、定植後、早くば、三十年、次に四十年、遲くそだつ處では五六十年後の時である。普通の樹齢として四五十年頃である。それで即、一家の柱となり、又防禦的用としては板塀やしたみ板羽目板等となり、裝飾用と同時に塵埃防禦の二階板ともなり、其他諸般の用を成しつゝある時で、亦樹木として趣味ある

時である。

◎是をまた人に比したならば、凡三十歲內外の男女で共に身心の尤も壯なる時である、即ち滿二十五歲で村會議の年齡に入り、滿三十歲から村長となつてよい年齡ぢやと定めた、如くである（女子なれば一家の主婦の初期時代である）それから先きは四十でも五十でも、六七十でも差支ないと云つたやうな次第であると同樣ぢや、何處かの縣では三十歲頃で其の向きの人々を集めて、村長敎育をする學校が出來たといふ事であるが、是も山人から見れば一種の枝取法であらう。其肝要なる頃合が實際同樣であらうと思ふ。さればこの時頃の枝取法はむづかしい。

◎こゝで斯樹の枝取りの取樣を第一回より第三回までに如何するかを記さんに、第一回は、杉樹全長の三分の二枝を存する。第二回は、全長の二分の一枝を存する、第三回は全長の三分の一、それから成長の宜しき物は四分の一位の物も多々之ある。それで益々成長力ある杉樹は埴谷杉の最も優良なる物である。

◎古往今來、埴谷杉の良材として、鄕土の木材營業人等は勿論近所の町村又は近郡近縣より知られ、東京は本所區深川區に於ける木場の大商賈にも知られて、常に稱美せらるゝといふは此の目通り、三尺內外の時に枝取法が宜しきに適へる爲め、與つて効力あるのであります。

◎そんなに効力を成す處の道具には、何物を用ゐるかと言へば、曰く鉈抱力である、曰く手斧である、たつたこの二つの道具のみであるが、それを以て、二三間の高さで振り廻すはまア誰でも出來さうであれど、五六間乃至七八間或は十數間の高處で振りまはす、之はチト難かしい藝當であつて、此事は埴谷の昔でも、今

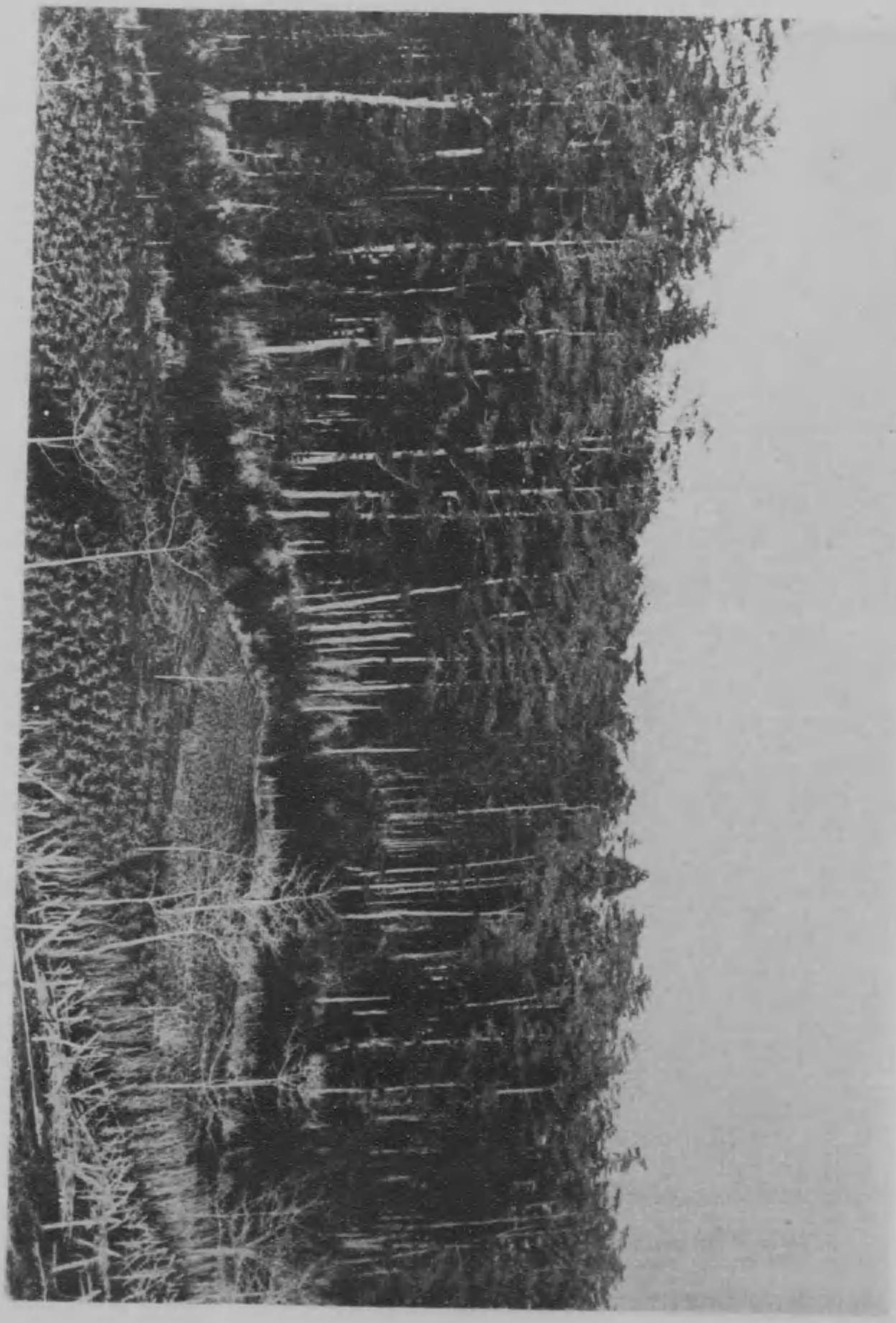
時に於ても、男子百人について二三人位しか自由に出來る者は無い。
◎その自由自在に出來る人間になると、五六尺から一丈周圍の大木でも厭はず忽ち數分時にして攀ぢ登り、物の觀事に、立派に枝取りをやるのである、
◎この藝當は農林山人には此を注意する筆の先きだけ出來るのであります。呵々。

(五)森林保護の事

吾輩山人が、丘岡山嶽に存在する森林樹木に對する其感じを言はば、彼崇高廣大なるを觀る時、誠に尊族親に會するが如くである又其の整然として生々繁茂して、若かやげる造林地のあるを見ては、我が幾千萬の同胞子弟が日に隆昌なるをも偲ばれる、然して只管『後生可畏』といふ程に大山嶽林廣丘岡林を成さしめんとの希望を休めぬのである。

凡そ世の中には、近慾といふて、目前の利益に是れ日も足らず暮し居る人間、此も今の時勢上巳むを得ぬ次第ではあるべけれど、より以上の以上に金錢財貨を畜へて居る農村の富者連が、彼の都人的成金の如くに株劵の利益を以て、座ながらにして贏得あるを誇り、昔人の諺に所謂寶打出の小槌の如くに思意する者あるを遺憾とするのである。其故は我輩農業者は、實に斯の土地に親みて此地面より生ぜしむる所謂百穀草木及之に直接關係する人々が多々益々繁榮して是を之務むべきであると確信する處の根底より考へ來れるのである。農人第一の上策は時の相塲如何に關せず、先づこれ以外に有るまいと思ふ。

されば逐年米穀增收の大切なるは勿論、畑地より生ずる幾多肝要なる穀類も吾等



の眼前に緊急を叫ぶものなるに接觸して熟之を見て、一日も安閑として居られざる境遇に勤めつゝあると同様に斯の森林林木といふは、實に我が一旦緩急あらば、乃ち其時の義勇ある兵士の身心を同じく之を公に捧ずる覺悟を想ふのである。今や、我が國家は、明治の終、大正の始よりして一年は一年と何らか急を告げつゝあるの時、近來は更に一日一日と憂慮を催して已まざるの際、吾等山人は斯國土山嶽丘岡の森林中に、日本魂の磅礴たるを想見して、玆に犧牲的の精神を、皇國保護の爲め養はんと欲する者である。

紀元二千五百七十九年

大正八年八月三十一日、記。

開墾畑地の歌

○陸稻の米

礎山道人

『蟹は甲らに似せて穴を堀れである。彼(あれ)が農林學校を創めたから、げもなく、骨を折つた上に損をするのである』

『蟹が好きなら横に這ふ、何(ナン)だ兒童(ガキ)大將で横好をやる、今に山の樹でも伐るだらう』。と或人々の馬の眼の横目で視られたのであつた。

馬の眼に負けないと思ふて、鷹の眼になつて考へたけれど根が眼白鳥(めじろ)の目であるから、百舌鳥(もず)を恐れて逃る如く、銀行へ行つて金を借りた。

學校を癈(や)めてしまへば、吾が好學(かうがく)の趣味を缺く。

夜への春雨の、清々と晴れた時であつた。材木屋と山へ行つた時、眼白鳥が高聲に、うるはしく囀つて居つたのであつた。

吾が十四五歳の時、新家(ニヒヤ)の五郎さんと、眼白鳥の囮籠(オドリ)を懸けた。その覺えある、繁枝(しえ)のさはらや、小杉や、其形容(カタチ)も變らんで居るものを。、、、、、、、、、

と思つて一度はそれで止めて歸つた。

或夜の雨に、蟹の室(ムロ)へ激流(ゲキリウ)が來たやうな夢を見た。そのあくる日、「何日(イツ)ぞや一寸お話の時のねだんで」と、材木屋がほゝ笑んで來た、

銀行からは期限の報知が來た、

蟹の住む里川へ筏には流されず、

尺締丸太(シヤクシメマルタ)の數百本を、夏の炎天に照らされたるを、見るが哀れであつた。、、、、、、、、、

天秤棒にする小杉も眼白や唐鶸(カラヒワ)の止(と)まつて居た雜木までも、
その雜木や大杉や椹(サハラ)へからまつた藤かゝゝつらの類までも、のこらず、
又さしこの黒足袋(クロタビ)で押し分けた、篠薄や篠の刈杙(カリクヒ)までも。
鋸や鋭鍬の跡で、奇麗に新畑と成つて居る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

あゝ、宵(いつぞ)や、春雨の露玉が朝日の光に、きらきらとして、吾が頬や
眉毛にふれた、あの時仰いで見た大小の針葉樹の光の反射は、………

實に白妙(しろたへ)の玲瓏(レイラウ)の眞玉の如く凝れるか、吾が雙手(もろで)に掬しても消えず、
こぼれず。
この白精米(しらげ)の美しさよ。
あの兒童(いたづら)の三太郎米とは誰が惡口ぞや、
この本當(ほんたう)の陸稻(をかほ)の好い米をなア、
嗚呼十反歩、松杉の形(カタチ)を、新築の校舍にして見たも善いが、
この陸稻穗の米を食(た)べた菊月の夕飯(ゆうげ)は、
吾が腹の中まで美しい心持である。

大正十一年四月二十三日

大日本八洲の國に名におへる山の淑人を我里に迎ふ。

山高み益良雄の伴上總なる埴谷小杉は繪の如く見む。

みよし野の吉野の大人も遙々に埴谷小郷に挿杉愛づかも。

大日本山林會視察旅行の時

嚴嶋にてよめる　蕨　眞

五百箇岩の千引の巖に路造り諸國人を御仙に登らす。

樹といふ木草といふ草眼ぐはしも、嶋とりよそふ宮嶋の神。

古ゆ人の稱へし巖の秀の瑞宮嶋を山登り見つ。

嶋めぐり玉なす海の和やかに神の美社遙かにぞ見ゆ。

久方の天のくはしき生立ちの萬樹隱り歌おもふ吾は。

嶋山の高峯をよそふ赤松葉千萬玉の露にぬれ立つ。

杉の木は無きかとよく見るに杉の古くして大なるもあり、又近き頃に植ゑたるも見ゆ

たにぐゞのさわたる處、杉の木はすくすくのびぬ、齒朶ゆ風出づ。

齒朶の風御仙に吹きて美鳥居の波ゆるやかに燈かゞよふ。

ところ〴〵山水走り榊葉の美豆葉ゆるがし瀧落ち和む。

これの御山にして世に未だ博く知られぬ大巖の豊かに立ちもとほるが如くにして、其圓らかなるありさま、いはむ方

なく珍らし。彼の妙義の方形にして奇しきそれに優りて吾山人の心さへ自ら圓滿ならしむるものありける。

神代より島の固めのまろらかに是の大巖は尊きろかも。

天と水と靈しの極み眼のわたり美仙の上に觀つゝ休らふ。

栂の樹の神さび立てる小葉繁に吹く風あはれ海よ山の秀に。

栂の木の繁枝に登る朝つく日拜む吾をまこと山人。

御仙峯のその頂に根をよろひ立てる美杉は二幹にして。

美津々々し神の宮嶋よく見すと御仙大巖は吾を向かすも。

敷きよろふ杉が根よしと腰おろし松風のむた大巖を仰ぐ。
たつた姫昨夜(きそ)の雨もて美(うる)はしみ、大巖も松もあやに瑞(みづ)しき。
茲にして世には見られぬ大巖を吾はよく觀(み)つ吾が心ゆも。
杉の根にしりいたむまで休らひぬ、御仙の上に大巖と吾と。
大巖の前つ小岩に心和(うらなご)み面現らはせる美佛(みほとけ)あはれ。
美佛(みほとけ)の和(なご)みのおもわ斯の山の美豆(みづ)しき影の尊きかもよ。

麓の大巖をよめる一首

秋雨の清々(すが)しきに山姫の衣織(きぬお)りいだす大元(おほもと)の巖(いよ)。

林業に生命を得てよめる

市町に、誇る痴者(しれもの)、黄金もち、人をしひたぐ、地球の上に、金持ちほこる、國こそは、國をしひたぐれ、うつせみの、人し哀しも、あしびきの、山より出る、眞清水に命つなぎて、青雲に、かけらむすべの神力もが。
米くひの子らぞ悲しき麥くひの外國(とつくに)の兒に國押されすも。

温泉をよめる歌一首並に短歌

富士の峯(ね)の、その懐に。雲こそは、眞玉(またまつ、)包めれ。そのまたま、函嶺(はこね)に藏(をさ)め。奇(くす)しくも湯には匂(にほ)はす。うつせみの、人に見すれ

ど。黄金戀ふ、兒らには見えず。山人の礎左のくたびれ。癒えしめし、其の美しき美湯の神はも。

美湯の神礎左を愛しとぞ、雨雲の杉苗やはす如くなるかも。

富士の麓

世界平和祝にあひて詠める

現し世にたゝ一つある遊び庭樂しき思忘れてあらめや。

富士の野に學びの兒らと朝まだき馳り遊びき命延ぶがに。

富士の野の南の庭は地球の上の平和を祝ふ常世なれかも。

○

世界に、人ら種々、劣り優り、數へもあらず、過ぎし世も、萬世しらず。來む世にも、萬世知らず。日の本の富士の眞面に、大和民族うべも樂しと、鏡なす、見つゝ遊ぶも、神の常庭。

神代より平和の命幸かれと不二の大庭見れば樂しも。

朝日

朝つぐ日、直に照らせば、なさけある、大和の心、今日に赫よふ。

もろこしの、大き聖が憧れし、仁といふ國、日の出る國。

日る出づる、御國ぞ早き、梅の花、開きて匂へり、民の軒ばも。

○

湯の瀧をよめる歌一首並短歌

つがの樹のいやつきつぎに、天そゝり立てる山並み、青雲に白嶺の底ゆ、千早振る、神ぞ湯沸す、その美湯を、あを人くさに、今日もかも、ゆたにあみさす、樹々若葉、狭雲露玉、春想ふ、雲の山の上。佐保神の、遊びしみあと神ながら、宇豆のみけしを、朝まだき、洗ひましけむ、湯の湖美面の光、匂ひけむ、美影のなごり、萬葉の綾もさや／＼、若葉風、廣らに豊かに、落ち和む、御湯の瀧はも、山人を吾子となづかす、眞心ぞ平常。

たらちねの母の懐おもほえぬ、ゆたに抱かす美湯の瀧はも。

大正九年十一月　十日千葉縣山林會創立第一回の開會あり、官民合同和氣靄々の裡、國家的忠實にして然も個人的智徳の發展を催すを得、剛健篤實、如斯の會は千葉縣に於ては初めて之を觀たり。

古ゆ大き聖が山をしも樂しと言ひき眞美さかな。

埴岡農林學校創立十周年を迎へてよめる

他をしもをしへむと思へば巳が先づをしへられけり十とせの間。

父逝きて寂しきあまり吾が建てし學舍にして思ひ難づめり。

私立植園農林學校より千葉縣開催關東聯合教育大會へ出品の苗木數種

梅の花散りのまがひに父逝きぬ、櫻咲く頃學兒と居り。

櫻花咲けば悲しもうつし世や、人の子を見て學び煩らふ。

十年へし今日もかはらず他の子も我が子と同じ學び煩らふ。

吾が縣をしへのつかさ今日迎へ十とせの嘆きわびにわびけり。

伴に來し日文のあるじ親しもよ我にかはりて先づわびて居り。

我が縣をしへの大人と山人と相識る今日は十年の想ひ。

今日學ぶをしへ兒の者一人居らず花吹く風にかくれたるかも。《日曜日》

山人は思ひ足りけり、しかすがに山路たどりて樹を相語る。

『民間造林の中より』

第一版の御高評

『民間造林の中より』に就て

御高評を賜りたるを左に掲げて厚く感謝を申上ます、　　獻生

◎折原千葉縣知事殿より（一月廿六日千葉地方森林會終了の際）

『先日は、あの本をありがたう、未だ一寸はじめの方見ただけですが、面白さうに見ました』

◎千葉縣農務課長堀田大人より（一月二十七日、千葉縣山林會創立發起祝の際）

『これは結構な本が出來ました、郷里に居る老父の許へ送りたくも思ひます、尙ゆるりと見てから申しませう』。

◎千葉毎日新聞社長五十嵐大人より。

『我が社の許も早速にと思つて居るのですが、今一寸手が缺けてゐて困ります此の三つ組杯は、官民を問はす、特志家を我社に於て表彰する記念品であります、早速にこれを贈呈

しますゝ　あとでゆる〱評を書きます。

◎本多林學博士より

拜啓時下益々御安康奉賀候、陳ば、今回は貴著『民間造林の中より』御惠贈下され本日落手難有奉深謝候、早速熟讀玩味致候へば裨益大なる事と存候、不取敢右御禮まで　草々

大正九年二月十二日

◎石原理學博士より。

拜啓御著『民間造林の中より』御贈り下されありがたく御禮申上ます、大兄が父祖よりの尊い事業を繼承せられよくその眞價値を理解して一意之に盡瘁し依て鄕村を導かるる面目の其處にあらはれてゐるのをうれしく存じ上ます、超俗的な立派な書物の体裁も何よりいゝ感じを與へられます、御禮に添へてこれだけの心もちを申し上ます、御自愛いのり上ます　敬具

大正九年二月十一日

◎齊藤茂吉國手より。

御高著拜受。正岡子規先生の書（色紙及丹冊）實に忝く拜見仕候。山林業は正岡先生の夢想し居られたる事ゆゑ、貴家の御骨折は即ち正岡先生の御志を繼ぎ實行なさる事と相成り尊くもゆかしく存じ奉候、御禮まで　敬具

大正九年二月十六日　長崎ニテ

◎千葉縣農務課河野林業技師より

拜啓余寒之砌益々御清榮之段奉慶賀候、扨先般森林會の節は色々御高配に預り候段奉感謝候、尙其節は貴著『民間造林の中より』難有頂戴直に再讀三誦錦地方の造林方法を充分會得仕候のみならず今日の鬱蒼たる杉林や亭々たる松樹之蔭には必ず畏敬すべき古人の俤か付き添して居る事が窺はれ、其既往數十年や百數十年の經歷には累歲無慈悲な風雪の襲來に遭ふたことや又屢々亂暴な時ならざる斧鉞の攻擊を受けんとしてきた事などの忍はれ自然今の老杉古松に對し崇敬之念禁する能はざるもの有之候、殊に一般山持ちの心の持ち方を敎へられたる點など誠に感服の至り

に存じ候、先は乍延引御禮旁如斯に御座候、　草々頓首

二月十四日

◎沼津中學教諭大壙學道大人より

拜啓益々御清適奉賀候、「民間造林の中より」壹部御惠贈を辱うし御芳情難有御禮申上候、一寸入口のみ拜讀仕候か小生には造林事業などトンと不案内ながら多年御丹誠の實驗敎訓毎篇に充ち別して當世に渡る稀なる御平生即ち、皇室中心質實剛健の御抱懷寔にうれしく存じ候、郵便に接せし際は御家集の歌ならむと想ひしが、それならで御平生の目的に關する此美書、學校の育英と共に世に擴らむことゝ確信し申し候、そのつもりもて知人にも語り愛藏致すべく候春雨あたたかにけふる小窓邊にて、右まで不備、

大正九年二月十八日夕

沼津町　上香貫

又本誌農村研究に就て、

◎千葉縣教育課長大嶋大人より。

拜啓余寒嚴しく御座候處、益々御清榮大慶の至に存候、毎々御經營の農村研究御惠送被下、農村を知る上に於て大なる啓發を忝ふすると同時に、紙面に溢るゝ愛國の御至誠に感奮禁せさるものに有之候、先は右とりあへず御禮まで申上候　敬具

二月十六日

衆議院議員

關和知大人より

秋暑の候愈々御淸祥奉大賀候、毎々農村研究御惠贈下され有難拜讀罷在候、尚過般御貴著、『民間造林の中より』御示しを辱うし折柄公私多忙遂に存じながら御禮も不申上失禮の段不惡御仁恕下され度、貴台の事業は即ち貴台人格の反影にて農林の經營も學校の施設も、將、日常の文章もその眞摯にして高趣に富ませらるゝは故なきに非す候、此に改めて甚深の敬意と謝意とを表し候、近刊農村研究巻頭の一文『農村と風敎』近頃快心の文字一層小生の興味を惹き申候、「朝鮮的の事大根性」寔に適切の評に候、日本は昔より道義を以て誇りをる國なれど今日にては國民の良心は全く靡痺して權力と金力と

の前には何ものも無き有樣に候、是は明治以來の敎育が誤なり、政治が誤りなる結果にて之を振作奮興するに容易の業に非ず、矢張敎育、政治等の根本より叩き直さねばならず、十年の計は樹を植ゆるに在り、貴台が樹を植つゝ且人を植ゑつゝある熱心と努力とは眞に當世の要務に御座候、結末一句『自治の精神は吾人の精神より始めたい』云々、何等の達見ぞ、農村の風敎の頽廢は國家の基礎の壞廢に候、此氣運を支持して且向上せしめんとする大任に對して重ねて同感と切情とを表し候、久潤の御詫旁一書如斯に候　敬具

大正九年九月三日

東京。鵜澤總明博士より

拜啓時下春寒之候益〻御清榮恭賀候然者此度は高著『民間造林の中より』一部御惠贈被下誠に忝く奉萬謝候御精神之在る處は自序之中に躍如たるもの有之、崇高森嚴之山林美に重きを兼て實際問題に觸れて一世を警醒せられむと欲するもの感佩の外無之候、書中の記述は總て經驗に基かれたるもの小生の如き門外漢に取りても解釋困難ならず趣味と實益を併せ備へたる良著作と存じ後々翫讀可仕候、先は不取敢右御禮迄申述度如此に御座候　敬具

三月九日

◎高濱虛子先生の經營年久しき『ホトトギス』第二十三卷第三號新刊紹介に曰く

農林山人は即ち歌人蕨眞氏なり。著者上總に農林學校を興し、造林の事に從ふや年あり。その雜誌『農林』『農村研究』等に發表せるところを集めて本書を成す。前後二編に分ち、前編は事業の根抵たるべき、地理、歷史、人、業務、精神、風俗、敎育等の諸項を說き、後編は、實際造林に當つて要事を說く、言々周到にして潤ひを失はず、著者の現代に對する抱負感想の隨所に現はれたるを見る。農林の寫眞版の外、鳴雪翁、不折翁の題字及題言あり。四六判、布裝、一二〇頁（定價一圓五十錢。千葉縣山武郡睦岡村埴谷四四九、農林社出版部發行）

◎三宅雪嶺翁主筆『日本及日本人』玉石同架に於ては(第七百七十七號三月一日發行)

著者農林山人本名蕨眞一郎氏又の名、礎山道人、歌の名蕨眞(わらびまこと)、曾て歌を正岡子規居士に學んで名あり。本書は山野森林に托して著者の天品述懷を吐露せるもの、林學農學上は勿論、藝術的小品として興味あり。

(著者申す、前記の二大雜誌は、正岡子規翁の創めたる根岸文學に厚き關係ある先輩の居る所なり、著者を知ること師の如きものあり。)

大阪每日新聞社圖書室より

拜啓早速ながら近刊の『ホトトギス』によりて豫て『農林』『農村研究』等御發刊の由、尙今度『民間這林の中より』御出版の由も承り候、社內に恰も同じ研究に腐心せる者も有之尙それを保存して永く閱覽の便に供したく存じ候につき相叶ひ候はゞ各一部宛御惠贈を給り度此義得貴意度候　草々

(三月三日)

東京、鑄金美術大家、舊根岸短歌會の詞兄、香取秀眞大人より

農林叢書御惠贈被下御芳志拜受仕

候、永く書庫を飾るべき御著と存候、次々にかゝる農業書を御出版の程希望にたへず候。二月上旬御上京との事是非御立寄被下度候　草々

(一月廿六日)

新總房新聞の第二面に於ては

本縣森林會議員にして篤農たる山武郡睦岡村埴谷蕨眞一郎氏は鄕里に山林を經營し且つ其傍私立農林學校を設立經營しつゝあるが今回其著述にかゝる農林叢書『民間造林の中より』と題する瀟洒たる一書を發行せり

(中略　各項とも蕨氏一流の美文的麗筆を以て記述し所論何れも正鴻にして而も忠實、斯業者の好參考書たり、又農林家にあらずとも本書に依りて森林美を味はゝ得る所決して尠少にあらざるべし、尙附錄として、千葉縣山林技手千葉源太郎氏が埴谷に於て講演せる『材積計算法』及び『木材の相場』の二編を添へたり、卷頭には、

中村不折畫伯の題字、內藤鳴雪翁の序文序句、村上楢村人(高崎中學校敎諭)の序文其他あり。(一月廿八日)

『萬朝報』新刊批評には

前編に於て民間造林の如何に困難なる事業なるかを實例に就て述べ、後編に於て、苗を作る方法、苗木の定植、林地の選擇、森林保護等造林の實際を說けり。附錄として千葉源太郎氏の材積計算法を添ふ。

（二月十日）

『東京朝日新聞』出版界欄に民間造林の事に畢生の力を注げる著者が造林に關して雜誌に發表せるものを蒐輯したり。

（二月八日）

◎文學趣味を以て千葉縣の青年實業界に立てる、大塚森の人君より

農林山人樣。今日西原氏から『民間造林の中よりの』御著頂戴いたし、內容拜見、大人の造林談には大に得る處ありました。それよりかは私の共鳴を見出しましたはその內に大人の社會觀、人生觀であります。何れ不肖も『森の中から』の拙著を公にする事に致します。その時批評を願申上ます、先づは御禮迄。

（二月十二日）

◎千葉縣立高等園藝學校敎諭吉田秀臣大人より

拜啓、春寒料峭其後御變も無之候哉扨て此度は貴著『民間造林の中より』一部御惠與の光榮に預り芳情萬謝奉り候、一々面白く拜見仕候、殊に『陸稻の米』には尠からざる共鳴を感じ申し候、何れ改めて所懷披攊致すの機有之べくと存候へども取敢す右御禮申述べ度如此に御座候　敬具

（二月廿日夜）

『春寒し林間に君何語る』

◎東金高等女學校敎諭布施孝大人より

拜啓餘寒酷敷候處愈々御淸勝奉賀上候、扨て先達は尊著『民間造林の中より』を御寄贈に預り難有奉存候漸く昨日を以て一通り拜見仕候、前編に於て國家百年の大計や祖先の功績等を述べられ、後編に於て杉木の仕立方其他を親切丁寧に御敎示相成候處誠に徹底的に有之前後相待つて平素の高志を拜察するを得敬服仕り候茲に謹んで御禮まで申述度と存候

敬具

◎大日本山林會報第四百四十八號（三月十五日發行）新刊紹介欄に左記の御高評を賜りたるを、今回茲に掲載して深く感謝申上候。　蕨生

◎『民間造林の中より』

蕨農林山人著卷帙を開く前に先づその瀟洒たる裝釘に雙眸を惹かされる、心持淡紅の粗い麻布の表紙に綠の芭蕉布小片を帖つてそれに『農林叢書民間造林の中より』と題して居る、輕快なる色調の埴谷の壤に對比して矗々と延びたる杉林の翠を想起せしむるの意か否かを知らないが、卷を披けば冐頭中村不折畵伯と内藤鳴雪翁の題字や序文があり次いで本論に入り先づ二編に分つて、その前編五十二頁に亘りて著者が桑梓の地たる、またこの說かむとする齊整の美林の育くまれたる千葉縣山武郡睦岡埴谷の鄕土史と植林に對して父祖以來の辛楚等を叙し後編四十頁を通じては著者が幾十年の經驗によりて得たる埴谷に於ける杉挿木造林法を誌し苗木の作り方から林地の選定定植法、及保護に至るまで詳說して更に數葉の寫眞をも挿めり

大正八年十二月二十五日印刷
大正九年一月一日發行
大正十一年四月十八日再版印刷
大正十一年四月二十日再版發行

定價金七十五錢
郵稅金五錢

版權所有

著作者　千葉縣山武郡睦岡村埴谷四四九番地　蕨眞一郎

發行者　千葉縣山武郡睦岡村埴谷四四九番地　蕨眞一郎

發行所　千葉縣山武郡睦岡村埴谷四四九番地　農林社出版部

印刷所　千葉縣千葉市千二百五十番地　西原活版所

印刷者　千葉縣千葉市千二百五十番地　西原春吉

390

終